

武庫川女子大学紀要

人文・社会科学編

第63巻

武庫川女子大学

2015

武庫川女子大学紀要

人文・社会科学編

第 63 卷

THE BULLETIN OF MUKOGAWA WOMEN'S UNIVERSITY

Humanities and Social Science

LXIII

目 次

CONTENTS

『RÔMAJI ZASSHI』に邦訳されたグリム童話について

—日本初のグリム童話邦訳をローマ字で訳出した訳者について—

野口 芳子

Grimm's Fairy Tales in the Rômaji Alphabet:

The Translations in the Rômaji Zasshi and Their Translators

Yoshiko Noguchi

(1)

随伴性判断課題における「無関係性」の認知を規定する諸要因

北口 勝也

Determinants of Cognition of “irrelevance” in Contingency judgment task

Katsuya Kitaguchi

(13)

Kestenberg Movement Profile 理解のための動きの実体験に基づく教材研究 崎山ゆかり

A Study of Teaching Materials based on Movement Experiences

for understanding Kestenberg Movement Profile

Yukari Sakiyama

(21)

エンドオブライフにおける宗教の役割

—医療, 葬儀, 自助, 介護—

大西 次郎

The Role of Religion at the End of Life:

Health Care, Nursing and Welfare Services, Funeral Services, and Self-help Groups

Jiro Ohnishi

(31)

子どもの連合運動の発達指標としての Fog test とその臨床的適用

萱村 俊哉

Fog Test as a Developmental Scale of Children's Associated Movements and Its Clinical Application

Toshiya Kayamura

(41)

『RŌMAJI ZASSI』に邦訳されたグリム童話について —日本初のグリム童話邦訳をローマ字で訳出した訳者について—

野 口 芳 子
(武庫川女子大学英語文化学科)

Grimm's Fairy Tales in the Rōmaji Alphabet: The Translations in the *Rōmaji Zasshi* and Their Translators

Yoshiko Noguchi

*Department of English, School of Letters,
Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663-8558, Japan*

Abstract

The first Japanese translation from Grimm's Fairy Tales for the general public (as distinct from translations in English textbooks) was 'The Little Shepherd Boy' (KHM152) in the magazine *Rōmaji Zasshi* in April 1886 (vol. 1, no. 11), translated by Kin-Ichiro Katayama into Rōmaji (Roman letters used to represent Japanese words). Another tale, 'The Straw, the Coal and the Bean' (KHM18), was translated by Chusuke Imura in *Rōmaji Zasshi* in June 1887 (vol. 2, no. 25). However, details about these translators (besides their names in Rōmaji), their motivations, and the original source language (English or German) have been unknown.

The present author has clarified these details. The German teachers Rudolf Rehmann and Kajō Nakayama motivated the translations, which were from the German, and the forensic medicine specialist Kuniyoshi Katayama (Kin-Ichiro's brother) probably inspired their translation into Rōmaji. This paper established that several Rehmann Society members were engaged in translations of Grimm's Fairy Tales. These new discoveries will contribute to the research on the reception of Grimm's Fairy Tales in Japan.

1. 序論

グリム童話が最初に日本語に訳されたのは、英語教科書の抄訳¹⁾以外では、1886年4月刊行の『RŌMAJI ZASSI』(1冊11号)であるといわれている²⁾。グリム童話 KHM152³⁾「牧童」が、「HITSUJIKAI NO WARABE」という題で KATAYAMA KIN-ICHIRO によってローマ字で訳されている。『RŌMAJI ZASSI』には1887年6月刊行の2冊25号にもう1話、KHM18「藁と炭とそら豆」が「MAME NO HANASHI」という題で IMURA CHŪSUKE によって訳出されている。

ローマ字で訳出された2話については、訳者についても、翻訳の動機についても、使用原本の言語についても不明のままである。この論文の目的は、それらの詳細を明らかにすることと、なぜこの2話が選ばれたのか、その理由を探ることである。

2. KHM152「牧童」のローマ字訳

1) KHM152「牧童」のあらすじ

賢い牧童がいるという噂が、王の耳に届く。王は牧童を呼びつけて、3つの問いに答えることができる。お前を養子にして城に住ませてやるという。1番目の問いは、「世界中の海には水が何滴あるか」だ。牧童は王に「地球上の川をすべてせき止めてほしい。まだ数えていない川の水が、1滴も海に注がないようにしてくれたら、海に水が何滴あるか答える」という。2番目の問いは「空にはいくつ星があるか」だ。牧童は大きな白い紙を要求し、そこに羽ペンで「目に見えないくらい小さな点を数えられないくらい多く描き」、空の星はこの紙の点と同じ数だけあるという。3番目の問いは「永遠は何秒か」だ。牧童は「ヒンターポンメルンの国にダイヤモンドの山がある。山は平坦な道を1時間歩いたほどの高さ、幅、奥行きがある。そこに百年に1度、小鳥が飛んできて嘴を研ぐ。この山が完全になくなったなら、永遠の最初の1秒が過ぎる」と答える。王は牧童の賢さに感服して、約束通り、彼を自分の養子にして城に住ませる⁴⁾。

2) KATAYAMA KIN-ICHIRO 訳「HITSUJIKAI NO WARABE」

KATAYAMA のローマ字訳は、原文にはほぼ忠実な訳だが、次のような誤訳も散見する。「目に見えないくらい小さな点を数えられないくらい多く描いた」⁵⁾というところを「kami no omote wa uchiyogorete mirubyō mo arazu」⁶⁾と訳している。つまり「小さくて見えない」点を、「汚れて見えない」点と誤訳しているのである。さらに「この山に百年に1度小鳥が飛んできて」⁷⁾という表現を「Ito mo hisashiki inishie yori toshidoshi kono yama ni kitaru tori arite」⁸⁾と訳している。つまり、鳥が来るのは「百年に1度」なのに、「年に1度」と誤訳しているのだ。しかし誤訳はこの2カ所だけで、あとは原文に忠実な訳である。なお、この話の出典がグリム童話であることは、明記されていない。

3) KHM152「牧童」(Das Hirtenbüblein)について

この話は初版ではなく、第2版(1819)から152番に挿入されたもので、決定版(1857)までその番号で収められている。ルードヴィッヒ・アウエルバッハー (Ludwich Auerbacher 1784-1847)がバイエルン地方の「なぞなぞ笑話」(Rätselschwank)を書きとって、グリム兄弟に送ったものである⁹⁾。アウエルバッハーもこの話を自著『青少年のための小冊子』(Büchlein für die Jugend, 1834)に収めている。そこでは質問は、1つ目が空の星の数、2つ目が海の水滴の数、3つ目が古い木々の葉の数である。この話は類話が数多く存在するが、最も古い出典はストリッカー (Stricker, 筆名で姓なし)が僧侶の笑話を集めた『プファフェ・アミス』(Pfaffe Amis 1240?)であろう、とグリム兄弟が注釈書に書いている¹⁰⁾。ストリッカーは聖職者に一杯食わせる貧しい庶民の話を収集したという。貧しい身分の牧童が、その知識が評価されて王の後継者になることなどあり得ない。それゆえ、この話は封建社会の硬直した現実を痛烈に風刺した「笑話」なのである。

2. KHM18 番「藁と炭とそら豆」のローマ字訳

1) KHM18「藁と炭とそら豆」のあらすじ

貧しい婆さんの台所から抜け出した藁と炭とそら豆は、一緒に旅に出てよその国に行くことにする。小さな小川の畔に来ると、橋がない。藁がこちらの岸からあちらの岸に寝そべって、炭にその上を渡るよう促す。炭は真中まで渡ると、下を流れる水音に怯えて足がすくみ、立ち止まってしまう。すると炭の火が藁に移り、藁は2つに切れて水に落ちてしまう。炭もまた一緒に水中に落ちてしまう。岸にいたそら豆がこれを見て大笑いし、笑いすぎて腹がはじける。偶然、岸で休憩していた仕立屋がそら豆を縫い合わせてくれたので、そら豆は命拾いする。しかし、仕立屋は黒糸を使ったので、このときから、そら豆には黒い縫い目が目につくようになったのである¹¹⁾。

2) IMURA CHŪSUKE 訳「MAME NO HANASHI」

IMURA CHŪSUKE のローマ字訳は、直訳ではなく意識であり、改変されたものだ。橋代わりにと寝そべった藁の上を渡る炭が、「水音に怯えて立ち止まったので」、藁に火がつき、2 人ともおぼれてしまうという原文の内容は¹²⁾、「" Ana osorosiki koto yona!" to iitsutsu noru ya inaya, wara wa omoki ni taekane ugoku totan, keshizumi wa massakasama ni suichū ye otosaretari」¹³⁾。怯えながらも消し炭は藁の橋を渡ろうとするが、橋の上に乗るや否や藁は消し炭の重さに耐えかねて動いてしまう。その拍子に消し炭は真逆さまに水中に落ちてしまう。つまり、炭が落ちた原因を「水音に対する怯え」から「体重の重さ」に変更しているのである。それを見たそら豆は笑いすぎて腹がはじけて、原文では「仕立屋」に縫い合わせてもらうが、ここでは「旅の医者」に縫い合わせてもらう。つまり、そら豆の命を救った者を「仕立屋」から「医者」に変更しているのである。なお、この話の出典がグリム童話であることは明記されていない。

3) KHM18「藁と炭とそら豆」(Strohalm, Kohl und Bohne)について

この話は手書き原稿である初稿では 5 番目に、初版からは決定版までは 18 番目に置かれている。カッセルのドロテア・カタリーナ・ヴィルト(Dorothea Catharina Wild)から口承で収集した話である¹⁴⁾。ブルクハルト・ヴァルデス(Brukard Waldis, 1490-1556/7)の『イソップ』(Esopus 1548)の話を大幅に書き直したものとグリム兄弟は推測している¹⁵⁾。そら豆の避けた腹を黒糸で縫う人物は、ヴァルデスの話では靴屋になっている。多くの類話が存在するが、そら豆にはなぜ黒い筋がついているのかを説明する由来のエピソードだけは、どの類話にも含まれている¹⁶⁾。最も重要な箇所だからであろうか。

3. 「HITSUJIKAI NO WARABE」の訳者 KATAYAMA KIN-ICHIRO について

1) KATAYAMA KIN-ICHIRO の漢字名とその経歴

ローマ字雑誌におけるグリム童話の訳者、KATAYAMA KIN-ICHIRO と IMURA CHŪSUKE に関しては、発見者の川戸道昭が「残念ながら彼らの漢字名や経歴については何もわかっていない…当時の東京帝国大学や高等学校の名簿などを調べてみたが、そうした名前は見あたらなかった。彼らの経歴その他に関する詳しいことは今後の研究にまたなければならない」¹⁷⁾と述べているように、これまでその消息は不明であった。

調査の結果、筆者はその漢字名と経歴を明らかにすることができた。KATAYAMA KIN-ICHIRO は、英語版の人名事典“WHO'S WHO IN JAPAN”にその名前が掲載され、下記のように紹介されている。

Katayama, Kin-ichiro, Pres., Kyushu Seisakusho Co., Dir. and Chief Eng. of the Takai Steel Works; b. in 1868 in Tokyo, brother of the following; studied elect. chemistry at the Imp. Tokyo Univ.; was in the Furukawa Mining; toured abroad. Add. Yone-cho Kokura.

(カタヤマ・キンイチロウ、九州製作所社長、タカイ鋼業取締役兼技術責任者。1868 年東京で出生。次に挙げる人物(カタヤマ・クニヨシ)の弟。東京帝国大学電気化学科を卒業後、古河鋳業所に入社。海外視察に行く。住所は小倉市米町。【拙訳】)¹⁸⁾

英語で Takai と書かれているのは Tokai の間違いで、東海鋼業のことである。なぜなら、『大正人名辞典』では、明治元年(1868)生まれの片山謹一郎は、「九州製作所、東海鋼業、日邦工業各取締役、工学士」¹⁹⁾と紹介されているからである。また卒業は電気化学科ではなく、電気工学科である²⁰⁾。

上記の 2 冊の本により、カタヤマ・キンイチロウの漢字名は片山謹一郎(1868- 没不明)であると判明する。彼は静岡県人片山龍庵の三男として生まれ、医学博士片山国嘉の弟であり、1896 年に東京帝国大学電気工学科を卒業すると、古河鋳業に入社して水電事業に従事するが、官立製作所が創設されると勅任を受けて、そこに移動する²¹⁾。その間、欧米各国を視察旅行する。退官後実業界に転じ、現横須賀酸水素(旧東海鋼業)、九州製作所の各社長を引き受け、東ボタン製作所の監査役も兼務する²²⁾。

片山謹一郎がグリム童話の翻訳を発表したのは1886年4月である。4月以前の彼の所属は第一高等学校予備門2級であった。彼は1886年9月から1887年3月まで「第一高等学校」の「予科第一級(獨)一之組」に所属している²³⁾。予科は上の学年に行くほど数字が小さくなるので、1級は最終学年に当たる。1884年に4級に入学した彼は²⁴⁾、1887年に予科を卒業し、1888年には「本科二部第一年一之組(工・理科)第一外国語英語・第二外国語ドイツ語」に在籍するが²⁵⁾、その後休学する。理由は不明である。1890年「本科二部第一年」に復学する²⁶⁾。1892年に東京帝国大学電気工学科に入学するが、1年生を2回繰り返す²⁷⁾、1896年に同学科を卒業する²⁸⁾。彼が帝大に入学したとき、13歳年上の兄、片山国嘉は法医学講座を担当する医学部の教授であった。国嘉も学費を兄の国棟(1871年死亡)に出してもらっていたので²⁹⁾、謹一郎の学費も国嘉が出していたのであろう。ドイツ留学中(1884-1888年)の国嘉の助教授の給与は3分の1になり³⁰⁾、経済的に厳しい状態が続いていた。1888年7月本科に入学した謹一郎が休学したのは、おそらく経済的な理由であろう。国嘉は10月末に帰国し、11月に教授に任命されるが³¹⁾、留学後の片山家は経済的苦境から脱するのに時間がかかったようだ。弟の復学は2年後の1890年7月になる。

2) 「MAME NO HANASHI」の訳者 IMURA CHŪSUKE の漢字名と経歴

IMURA CHŪSUKE とは、1906年に新宿脳病院を設立した初代院長、井村忠介(1868-1927)のことである³²⁾。忠介は井村家の養子である。井村家は千葉の佐倉藩倉奉行で元々財産家であった³³⁾。忠介は1885年7月に県立千葉医学校に入学したが、1888年9月に同校が改組され第一高等中学校医学部となったので³⁴⁾、1889年7月に卒業したのは、第一高等学校医学部である。彼は第一期生として卒業している³⁵⁾。同年9月に帝国大学精神病学科に選科入学し³⁶⁾、11月に医籍登録する。12月に法医学科選科にも兼留入学して³⁷⁾、1891年12月に精神病学教室補助の職につく³⁸⁾。帝大には医局がなく、実際の研修は巣鴨病院でしていたので、1892年2月には巣鴨病院嘱託となり、1893年9月に助手として入局する。1898年10月には国家医学講習会の精神病学講師になり、6年間教える。1904年に帝大を依願退職し、1906年に井村病院を創立する³⁹⁾。

彼は政治活動にも携わり、1920年に東京府医師会議員に選出され、日本精神病協会幹事になり、1922年には豊多摩郡代々幡町会議員、豊多摩群医師会副会長、町会議員を歴任し、1928年4月に死去するまで、井村病院院長として精神病患者の治療に全力を尽くす⁴⁰⁾。

井村は巣鴨病院では院長の呉秀三に師事していたが⁴¹⁾、呉院長が外遊中(1897-1901)は医長の片山国嘉が院長を代行した。片山国嘉が教授で、呉が助教授、井村が助手という関係にあり、井村は片山国嘉に教えを乞う立場にあった⁴²⁾。井村は榊俣が神経科の教授のときに、選科生として精神病学科に在籍しながら、片山国嘉が教える法医学科にも在籍するという、2学科同時在籍を实践する意欲的な学生であった。榊教授だけでなく片山教授にも教えを乞う必要を感じたのであろう。片山国嘉にとっては直属ではないにしても、数少ない法医学科選科生として井村は記憶に残る学生であった。そのことは、片山国嘉が設置した「国家医学講習所」に井村が講師として採用されていることと⁴³⁾、片山の「法医学鑑定実例集」という論文に、井村が鑑定を書いていることから伺える⁴⁴⁾。

井村が巣鴨病院で師事した呉秀三は、「生来文学、歴史を好み、また名文家としても知られていた」⁴⁵⁾という。彼が学生時代に書いた『精神啓微』(1889)は優れた作品であり、斎藤茂吉が一高生の時に読んで感動したそうだ⁴⁶⁾。呉秀三は文学愛好者だったのである。その傾向は家系からも検証することができる。彼は日本で最初の絵本版グリム童話を訳出した、呉文聰の弟なのである。

4. 片山謹一郎と井村忠介に影響を与えた人物

1) 片山謹一郎の兄、片山国嘉

片山国嘉(1855-1931)は静岡県医師片山竜庵の次男で、1870年に16歳で上京し、「大学東校(東京

大学の前身)の小教授で同郷の足立寛(緒方洪庵の適塾で学び、軍医総監になった医師)の書生となって勉強を続け、翌年には大学東校に入学し⁴⁷⁾、住まいを寄宿舎に移す。彼の生活は東校で教えていた兄の国棟が支援していた。国棟は日本近代生理学の基礎を築いた著名な生理学者であったが、若くして逝去してしまう⁴⁸⁾。1879年、国嘉は日本初の医学士の1人として東京大学医学部を卒業すると同時に、外国人教授ティーゲル(Ernst Tiegel, 1849-1889)の生理学教室の助手になる⁴⁹⁾。ティーゲルの裁判医学講義を通訳しているうちに、法医学に対する造詣が深くなり、1881年に助教授になる⁵⁰⁾。ティーゲルやベルツ(Erwin von Bälz, 1849-1913)といったドイツ人教授から医学を学んだ国嘉は、ドイツ留学に憧れ、1884年に夢をかなえる。彼はベルリン大学で法医学をリーマン(Carl Liman, 1818-1891)に、精神医学をウェストファール(Carl Westphal, 1833-1890)に学ぶが、教え方に納得がいかず、オーストリアのウィーン大学に研究の拠点を移す。ホフマン(Eduard Ritter von Hofmann, 1875-1897)の下で法医学を学び、ようやく学問上の疑問点が解消する⁵¹⁾。4年間の留学を終えて1888年に帰国し、帝国大学医科大学教授となる⁵²⁾。裁判医学を法医学と改称し、「93年の講座制発足に際し法医学講座の初代教授として、日本における近代的法医学を樹立し、科学の力によって法の公正を保つようにした」人物といわれている⁵³⁾。

片山国嘉は法医学を定着させるため、法律の改正を提唱し、精神病患者が罪を犯した場合、罰則を軽減するよう提案している⁵⁴⁾。有名な「刑法三十九条における『心身喪失者ノ行為ハ之を罰セス。心身耗弱者ノ行為ハ其刑ヲ減刑ス』の一条は片山の発案による」⁵⁵⁾といわれている。このほかにも『精神病院法』(1919)という著書もあることから、「監獄に於ける精神病患者をいかに保護すべきか」という論文を書いている井村忠介は、片山教授の著書や仕事に一高生の頃から、関心を持っていたと思われる。

片山謹一郎と井村忠介がグリム童話の中から2話をローマ字訳したのは、国嘉がドイツ留学中の1886年と1887年であった。1888年にベルリンの写真館で撮影された19人の日本人医学者の記念写真には、森田太郎(森鷗外)とともに、片山国嘉も写真に納まっている⁵⁶⁾。森鷗外の息子、森於菟がグリム童話を1902年から1906年の間に15話も訳しており⁵⁷⁾、鷗外と国嘉は同時期に4年間ドイツに留学し、4か月間同じ船に乗っていただけでなく、ベルリン大学留学中には「鷗外にとって、片山は気軽に訪ねられる相手だった」⁵⁸⁾としたら、グリム童話に関する情報も共有していたと思われる。

1863年に亡くなったヤーコプ・グリム(Jacob Grimm, 1785-1863)はベルリン大学教授で慣習法と言語学に造詣が深かった。ベルリン大学に在学中、国嘉や鷗外はヤーコプ・グリムの業績について知っていたはずだ。なぜなら法医学というのは、犯罪人の行動を綴るの必要があり、噂や証言をもとに「話」としてまとめる必要があるからである。これは伝承や法律故事を書きとる作業に酷似している。軍医として渡独した森鷗外も「猶太教徒ノ裁判医学」、「法医ノ自由」、「希臘羅馬人ノ法医学」など数多くの法医学に関する論文を執筆している⁵⁹⁾。鷗外の息子もグリム童話を訳しているとなると、法医学とグリム童話の関係は看過できないものがあると思われる。

そのうえ国嘉は「ローマ字の普及に熱心であったから、禁酒誓約などもローマ字にして数種の本を作り、これを桐箱に納めて明治天皇に献上した」くらいである⁶⁰⁾。彼は独自のローマ字表記法まで開発し、『ローマ字の假名式綴り方』(1913年)を出版している。「驢馬字会」が設立された1884年12月には、国嘉はドイツ留学中で日本にはいなかった。だからこそ彼は弟の雑誌への翻訳投稿という形で、会への支援を表明したのではないだろうか。

2) ドイツ語教師・ルドルフ・レーマン

予備門では将来工学科に進む片山謹一郎は、ドイツ語を主とするクラスに所属しており、ドイツ語を熱心に勉強していた。この時期のドイツ語教師で特筆すべき人物は、ルドルフ・レーマン(Rudolf Lehmann, 1842-1914)である。彼はプロシア出身でカールスルーエ工科大学とオランダのライデン大学の「土木工学科で河海工業と土木工学を専攻し、卒業後はロッテルダム造船所に勤めた」技師である⁶¹⁾。1869年来日し、京都府にドイツ語教師ならびに建築技師として招かれ、欧学舎で教え、その後、1884年9月から1890年まで東京大学予備門で教える。その間、彼は1年間ドイツに一時帰国したので、

通算5年間予備門で教えたことになる⁶²⁾。彼の功績は日本初の『独和辞典』を1873年に、日本初の『和独対訳字林』を1877年に完成させたことである⁶³⁾。工学技士でありながら、彼は日本で最初の独和辞典と和独辞典を完成させたのである。片山謹一郎は東京大学予備門で、彼にドイツ語を習ったのである。

レーマンのドイツ語の「教え方は総合的であり、桃太郎や舌切り雀の物語があると、早速生徒にドイツ語訳をさせ、先生はそれを添削するとともに自ら日本のことを学んだ」という⁶⁴⁾。日本昔話を独訳させたのなら、西洋昔話であるグリム童話も和訳させたのかもしれない。その際、和訳は彼が点検できるよう、ローマ字でさせたのではないだろうか。もし、そうだとしたら、片山が『ROMAJI ZASSI』に投稿したのは、レーマンの授業で出された課題であったのかもしれない。課題ではなく自主的な行動であったとしても、西洋と日本の昔話に興味を抱かせ、翻訳して子どもに伝える必要があると生徒が考えるようになったのは、レーマンの昔話を取り入れるドイツ語教授法があったからであろう。

井村については誰にドイツ語を習ったのか正確なことはわからない。当時、医学や工学を志す者は、ドイツ語を学びドイツの学問的知識を吸収しようとした。片山訳が掲載された1886年4月以前は、片山は第一高等学校予備門2級の学生であった。井村訳が掲載された1887年6月以前は、井村は県立千葉医学校の2年生であった。千葉医学校は1887年7月から改組されて第一高等中学校医学部になるが、翻訳した当時は、彼は県立千葉医学校の学生であった。1885年から1887年までの千葉医学校の時間割は、図書館にも医学部に保存されていない。それゆえ、1886年から1887年の第一高等中学校のものを参考にするしかない。そこではドイツ語はルドルフ・レーマン、寺田勇吉、高木計、吉田健次郎、山口小太郎、川島蔵吉、福島鳳一郎の7人が教えている⁶⁵⁾。おそらく井村もレーマンやこれらの日本人教師からドイツ語を学んだのであろう。

日本の医学は、ドイツから導入することが決められたので、医学用語はガーゼ、カルテ、ギプス、ケロイド、クランケなどのドイツ語がそのまま日本語として使用されている。千葉医学校では精神病学は眼科学教室が担当しており、1884年6月から1901年まで荻生録造が教えていた。彼はドイツ医学を学び、後にドイツに留学した人である⁶⁶⁾。1870年、政府がドイツ医学の採用を決定したとき、11名の青年医師がドイツに派遣された⁶⁷⁾。彼らは帰国後、医学校の先生となり、ドイツのテキスト、医薬品、医療器具を使って、ドイツ医学を教えた⁶⁸⁾。それゆえ、医学校ではドイツ語が必修とされてきたのである。将来、精神医学に携わる者として、井村はドイツ語を熱心に学んだと思われる。

上記の理由から、2人が訳したのは、ドイツ語からであり、英語からの重訳ではないと考えられる。

3) 中川重麗(霞城)

中川重麗(1850-1917)は霞城という筆名で、明治期に9話のグリム童話を翻訳している。彼はこのほかに霞翁、西翁、柴明、四明など数多くの「号」(呼び名)を用いている⁶⁹⁾。1889年から1893年の間にグリム童話6話⁷⁰⁾を雑誌『小国民』に連載している。さらに1896年には3話⁷¹⁾を『少国民』と改字された雑誌に連載している。すべて中川の翻訳である⁷²⁾。中川は文系だけでなく、理系の学問にも造詣が深く、化学、薬学、物理学、鉱物学など科学系の話も紹介している。しかし、文学翻訳者として以外の中川の実像については、これまで詳しく紹介されてこなかった。

今回、レーマンについて調査していると意外な事実が判明した。中川重麗は上記のルドルフ・レーマンに薫陶を受けた人々が結成した「レーマン会」の発起人だったのである⁷³⁾。彼は京都に生まれ、英語、理化学、鉱物学、植物学、製薬学など様々な学問を学んでから、1877年1月から1880年まで原口隆造についてドイツ語を学ぶ⁷⁴⁾。原口隆造は欧学舎(独逸学校)でルドルフ・レーマンからドイツ語を学んだ人である⁷⁵⁾。中川は1879年から京都の師範学校の助教としてドイツ語や化学を教えてから、1884年9月から東京大学予備門御用掛教員となり、11月には医学予備校嘱託になる。1885年9月からは東京大学予備門教諭に、1886年5月には第一高等中学校教諭となったが、6月には退職して、大阪で著述業に従事し、その後、大阪朝日新聞や日出(京都)新聞の編集者になる。その後、京都市立美術工芸学校などで嘱託講師をしながら、巖谷小波らと交友を結び、文筆活動にも力を注いだのである⁷⁶⁾。彼は1884年9月から1886年5月まで、東京大学予備門や医学予備校でドイツ語や化学を教えている。つまり、

ルドルフ・レーマンが教えていた時期に、中川重麗は片山や井村にドイツ語を教えていたのである。彼がレーマン会の発起人になり、レーマンが作った独逸学校(京都薬科大学)の最初の校主であり、創立以来の功労者であるのは、レーマンとこの時期に親しく交流していたからであろう。

片山謹一郎が学んでいた予備門と、井村忠介が学んでいた医学予備校の両方で、中川重麗はドイツ語を教えていたのである。学校を退職して文筆業に専念してから、中川が数多くのグリム童話を翻訳したことを考えると、片山と井村がグリム童話をローマ字訳しようと思った動機は、ルドルフ・レーマンの昔話教授法にだけあるのではなく、中川重麗の教授法にもあったのではないだろうか。なお、レーマン会の発起人には、東京外国語学校教諭の水野繁太郎も名を連ねている⁷⁷⁾。そして、彼も1909年に「雪姫」(KHM53)と「兄と妹」(KHM15)を翻訳している⁷⁸⁾。レーマン会の会員は、グリム童話翻訳に携わる人が多いようである。

4) 呉秀三の兄、呉文聰について

1887年9月にグリム童話(KHM5)「狼と7匹の子山羊」の仕掛け絵本『ハツ山羊』を訳した統計学者、呉文聰には5人の兄弟姉妹がいるが、男兄弟は末子の秀三のみである⁷⁹⁾。秀三が15歳のときに父親の呉黄石が逝去したので、兄文聰が世帯主として、14歳年下の秀三の面倒をみたのである⁸⁰⁾。

文聰の『ハツ山羊』が出た1887年は、秀三は大学生(1890年東大卒)で同じ家に住んでいた。当然、兄の絵本を熟知していたはずだ。呉秀三は上田万年と同じ時期に帝大の大学院生であった。このころは大学院生が全学部で50人弱しかおらず、文学好きの秀三は、兄と同じ「狼と七匹の子山羊」を訳した上田万年とも面識があったと思われる。

呉文聰が訳した『ハツ山羊』が、英語からの重訳ではなく、挿絵がドイツ人挿絵画家ハインリッヒ・ロイテマン(Heinrich Leutemann, 1824-1905)のものであることが、最近の研究で明らかにされた⁸¹⁾。ドイツ語の本である『ドイツの子どもの童話集』(Deutsche Kinder-Märchen. Heinrich Leutemann Stuttgart Leipzig 1884)から挿絵を拝借したということは、英語ではなくドイツ語から訳したものと考えられる。統計学の優れた文献は、主としてドイツ語で書かれているということを知り、呉文聰は1886年から一念発起してドイツ語を猛勉強する。山口弘一(国際法学者)に個人教授を依頼して、通信省で働きながら自習したのである⁸²⁾。『ハツ山羊』の出版は1887年9月であるから、1年間でドイツ語を修得してドイツ語本を訳したことになる。2年後の1889年には、彼はワッペウス(Johann Eduard Wappäus, 1812-1879)の『統計学論』(Einleitung in das Studium der Statistik)をドイツ語原書から翻訳している⁸³⁾。しかし、英語からの重訳である可能性も皆無ではない。なぜなら、ロイテマンの挿絵が入った『ドイツの子どもの童話集』ではこの話の題名は原典同様「狼と七匹の子山羊」となっているからである。『ハツ山羊』という題名の出所が、使用された英訳本にあるのかもしれないので、1886年までに出版された7種類の英訳本を調査してみたが⁸⁴⁾、子山羊の数を8匹と表示した本はなかった。この本は縮緬本の日本昔話シリーズで有名な長谷川武次郎の弘文社から、西洋昔話第1号として出版されたもので、第2号にはアンデルセン童話が予定されていた⁸⁵⁾。しかし、1号が売れなかったので、2号が出せなかったようだ。米が1升7銭3里8毛、製造業の労賃が1日男子21銭、女子10銭であった頃(1887年)⁸⁶⁾、子ども用の絵本を10銭も出して買う購読者はいなかったのである。これまで英訳本からの重訳とされてきたこの本は、上記の理由からドイツ語から翻訳された可能性が高いといえる。

5. 「日本驢馬字会」の成立と意義

もう1つの要素は「日本驢馬字会」である。1884年12月2日「同志の人々七十餘名が始めて東京大學物理學教室に集り、寺尾壽博士を議長に推し、種々相談を重ねた結果、愈『羅馬字會』を起こすと云うことに衆議は一致した」のである⁸⁷⁾。外山正一帝大文科大学長が祝辞と激励を兼ねた演説をし、「假名とローマ字と互に相提携して、協同一致、漢字の大敵に當るべき」⁸⁸⁾と力説する。彼は矢田部良吉(植物学教授)とともに、これまで反目していた大槻文彦らの「かなのくわい」と、「廢漢字」という点で協力体制を敷き、

漢字を覚える労力を省こうと、「小学教育にローマ字を採用する」よう働きかけたのである⁸⁹⁾。1885年3月7日にヘボン式を改良した「ローマ字会式綴字法」が決められ、4月に『羅馬字にて日本語の書き方』として発表される⁹⁰⁾。そして、ローマ字を普及する手段として『RŌMAJI ZASSI』第1冊1号が6月に発行される。

片山謹一郎はその第1冊11号(1886年4月11日)、井村は第2冊25号(1887年6月10日)の「子どものため」欄にグリム童話を1話ずつ訳出している。ローマ字会式綴字法を決める際に40人の「書き方取り調べ委員」が選出されたが、その中で最も熱心に五十音韻式を主張したのが、田中館愛橘であった⁹¹⁾。田中館は当時、帝大理学部物理学科の助教授であり、電気計測器などに取り組んでいたことを考えると、東京大学予備門で電気工学科進学を目指していた片山謹一郎が雑誌に投稿したのは、「ローマ字普及の父」と言われる田中館愛橘や、同じ静岡県出身の学長、外山正一などの影響もあったのかもしれない。

片山と井村が東京大学予備門や千葉大学医学部で学んでいたとき、多くの外国人教師や日本人教授は相互の意思疎通を図るには、日本語をローマ字で書く必要があると痛感していた。イギリス人チェンバーレン(B.H. Chamberlain, 1850-1935)だけでなく、アメリカ人牧師ヘボン(James C. Hepburn, 1815-1911)や技師サミュエル・ブラウン(Samuel Brown, 1810-1890)も熱心なローマ字論者であった⁹²⁾。それゆえ、医学、法学、工学などの学問的知識を海外から導入しようとする学者、研究者、技術者、学生などが、この会の主たる会員になったのである。ティーゲルやレーマンに日本語を伝えるとき、ローマ字で書いて教えた経験を持つ人々は、日本文化を世界に発信するには、ローマ字の導入が不可欠であると考えていたのである。

「日本驢馬字会」の会員には上田万年も名を連ねており、彼は会長の「田中館愛橘とはベルリン留学中旧知の仲」⁹³⁾であった。上田は日本語を世界的言語にするためには、ローマ字の導入が不可欠であるとして、ローマ字の国際性を高く評価している⁹⁴⁾。

上田は1889年にグリム童話 KHM5「狼と七匹の子山羊」を英語から重訳し、『おほかみ』という題名で言文一致の仮名文字を使い、着物姿の動物の挿絵を入れた絵本を出している⁹⁵⁾。樋口勘次郎もまた会員に名を連ねている。彼は1898年にグリム童話を2話(KHM5, 153)翻訳しただけでなく、グリム童話を小学校教科書に取り入れて教育的に利用すべきであると主張した人である⁹⁶⁾。

片山国嘉はティーゲルの助手として生理学の授業を通訳していたが、医学の授業で困ったのは漢字混じりの日本語文の説明と、実験設備の不備であった。実験を重んじるティーゲルはガラスの代わりに竹を使って実験器具を自ら製造したという⁹⁷⁾。機械や電気技術の獲得が医学の実験に不可欠であったのだ。国嘉の体験談は謹一郎の進路選択に影響を与えたのではないだろうか。医家の三男である謹一郎が、医学ではなく電気工学を選択した背景には医学実験室での兄の苦労話があったように思える。

6. 結論

片山謹一郎は東京大学予備門、井村忠介はや千葉医学校の生徒のころに、グリム童話をローマ字で訳している。つまり帝国大学に入る前段階の学校の生徒であった頃の仕事ということになる。19歳や20歳の青年であった彼らが学んだ外国語は、主としてドイツ語であった。1883年以降、東京帝国大学文学部では「英人、米人が完全にいなくなり、全くドイツ人のみ」になり、理学部では英米人教師もいたが、ドイツ人教師の増加が著しかった⁹⁸⁾。医学部や工学部の「教育や医療が主としてドイツ人教師医師によって」行われていたため⁹⁹⁾、予備門や医学部ではドイツ語を学ぶ必要があったのだ。

帝国大学電気工学科への入学を希望していた片山謹一郎は、ドイツ人の教授から工学を学ぶ必要があったし、精神医学の修得を目指していた井村もドイツ語を学ばねばならなかった。それゆえ、片山と井村が『RŌMAJI ZASSI』に訳出したグリム童話2話は、英語訳からの重訳ではなく、ドイツ語からの直訳であると判断することができる。井村訳より片山訳の方が原文に忠実な訳であるのは、両者のドイツ語力が反映しているからであろう。予備門でのドイツ語教育はそれだけ水準が高かったのである。

1886年に1話(KHM152「牧童」)、1887年に2話(KHM18「藁と炭とそら豆」、KHM5「狼と7匹の子山羊」)訳されたグリム童話の最初の3話の邦訳は、いずれもドイツ語から訳されたものである。その背景にはルドルフ・レーマンや中川重麗という民話に興味をもつドイツ語教師の熱心な指導と、片山国嘉や呉秀三という法医学や精神医学に携わる医師の影響があったと思われる。

理工学や法医学の関係からの選択であるからこそ、宇宙の謎に答える羊飼いの童の見事な答え、怯えから命を落とす炭の顛末や、他人の不幸を嘲笑う豆の天罰などが描かれた話が、真っ先に紹介されたのであろう。

心の「怯え」を体の「重さ」に変えたということは、恐怖心を持つ存在から、重さを判断する能力が欠如した存在に変えられたことを意味する。恐怖心の克服が命を救い、判断力の欠如が命を落とすのは、精神医学から見ても興味深い話である。そのうえ仲間の豆はその状態を見ても助けようとせず、ただ笑っているだけである。他人の不幸を嘲笑う行為によって自らの身を亡ぼしてしまうが、幸運にも医者の手術で一命を取り戻す。

精神医学を志す井村にとっては、他人の不幸を嘲笑い、天罰を受けたような場合でも、精神病患者の命を救うのが医者の使命である、ということを経験に銘じる話ではないだろうか。仕立屋を医者に変えたのは、医者になる自分の身に置き換えたからではないだろうか。明治期の他の訳本ではこの箇所は変更されず、「裁縫師」(渋谷保訳1891)や、「仕立屋」(木村小舟訳1908)と訳されている¹⁰⁰⁾。命を取り戻した豆には黒い筋をつけて、腹黒さが目立つようにしたのが、せめてもの天罰であろう。

宇宙の謎についての問いに見事に答える羊飼いの子に王は感心して、約束通り彼を養子にして王家を継がせるといふ話には、身分が固定された封建制を打ち破り、知識がある者に指導者としての地位を与える立憲君主の姿と、知識が身を立てるという立身出世の思想が見事に体现されている。

現在では知名度の低いこの2話は、明治期の人にとっては示唆に富む話として興味を引くものであった。英語からではなくドイツ語からの直訳であるという点と、最初の日本語訳であるという点で、ローマ字訳の2話は特筆すべき存在といえることができる。

注

- 1) 松山棟庵が『サンゼルト氏第三リイドル』(1873)で、深間内基が『啓蒙修身録』(1873)でグリム童話184番「釘」を文語体で邦訳している。詳細は右記参照。拙著「明治期におけるグリム童話の翻訳と受容」大野寿子編『カラー図説 グリムへの扉』勉誠出版、東京、pp.210-241 (2015)
- 2) 川戸道昭「グリム童話の発見」川戸道昭・野口芳子・榊原貴教編『日本におけるグリム童話翻訳書誌』ナダ出版センター、東京、pp.6、16-19 (2000)
- 3) グリム童話集 *Kinder- und Hausmärchen* は KHM と略し、その後に決定版の番号を入れて表示する。
- 4) Brüder Grimm, *Kinder- und Hausmärchen*, ed. by Heinz Rölleke. Reclam, Stuttgart, vol. 2, pp.268-269 (1980).
- 5) Ibid. p.268 (1980).
- 6) Katayama Kin-ichirō 訳『RÖMAJI ZASSHI』1冊11号(4月10日)、p.97 (1886)
- 7) Brüder Grimm, *Kinder- und Hausmärchen*, ed. by Heinz Rölleke, op. cit. vol.2, p.268 (1980)
- 8) Katayama, Kin-ichirō 訳、前掲書6)、p.98 (1886)
- 9) Brüder Grimm, *Kinder- und Hausmärchen*, ed. by Hans-Jörg Uther, Diederichs, München, vol.4, p.283 (1996)
- 10) Brüder Grimm, *Kinder- und Hausmärchen*, ed. by Heinz Rölleke, op. cit. vol.3, pp.152-153 (1980)
- 11) Ibid. vol.1, pp.117-118 (1980)
- 12) Ibid. vol.2, pp.268-269 (1980)
- 13) Imura Chūsuke 訳『RÖMAJI ZASSHI』2冊25号(6月10日)、p.70 (1887)
- 14) Brüder Grimm, *Kinder- und Hausmärchen*, ed. by Hans-Jörg Uther, op. cit. vol. 4, p.38 (1996)
- 15) Brüder Grimm, *Kinder- und Hausmärchen*, ed. by Heinz Rölleke, op. cit. vol.3, p.37 (1980)
- 16) Brüder Grimm, *Kinder- und Hausmärchen*, ed. by Hans-Jörg Uther, op. cit. vol.4, pp.38-39 (1980)

- 17) 川戸道昭, 前掲書 2), p.19 (2000)
- 18) *The Japanese Year Book. 1921-22.* Tokyo, The Japan Year Book Office, Tokyo, pp. 694-695 (1921)
- 19) 猪野三郎編『大正人名事典Ⅱ』日本図書センター, 東京, 上巻, p.88 (1989)
- 20) 明治 26 年の東京大学在学者名簿では片山謹一郎は大学電気工学科に在籍している. 『東京帝国大学一覧明治 26-27 年』東京帝国大学, 東京, p.317 (1894)
- 21) 猪野三郎編, 前掲書 19), p.88 (1989).
- 22) 中西利八編『日本産業人名資料辞典Ⅱ』日本図書センター, 東京, vol.1, p.69 (2002)
- 23) 『第一高等中学校一覧 明治 19-20 年』第一高等中学校, 東京, p.78 (1887)
- 24) 『第一高等中学校一覧 明治 23-24 年』第一高等中学校, 東京, p.78 (1891)
- 25) 『第一高等中学校一覧 明治 21-22 年』第一高等中学校, 東京, p. 84 (1889)
- 26) 『第一高等中学校一覧 明治 23-24 年』第一高等中学校, 東京, p. 91 (1891)
- 27) 『東京帝国大学一覧 明治 25-26 年』東京帝国大学, 東京, p.314 (1892). 『東京帝国大学一覧 明治 26-27 年』東京帝国大学, 東京, p.317 (1894). 両方の名簿に 1 年生として片山謹一郎の名前がある.
- 28) 『東京帝国大学一覧 明治 29-30 年』東京帝国大学, 東京, p.317 (1896)
- 29) 武智ゆり「法医学の基礎を築いた片山国嘉」, 近代日本の創造史懇話会編『近代日本の創造史』近代日本の創造史懇話会, 東京, p.30 (2011)
- 30) 小澤舜次『法医学始祖片山国嘉』新人物往来社, 東京, p.99 (1975)
- 31) 同上, p.100 (1975)
- 32) 田辺子男他編『東京の私立精神病院史』牧野出版, 東京, p.114 (1978)
- 33) 同上, p.118 (1978)
- 34) 『千葉大学三十年史』千葉大学, 千葉, pp.1426-1432 (1980)
- 35) 『第一高等中学校医学部一覧 明治 25-26 年』第一高等中学校医学部, 東京, p.49 (1893)
- 36) 田辺子男他編, 前掲書 32), p.114. 『東京帝国大学一覧 明治 22-23 年』東京帝国大学, 東京, p.237 (1889)
- 37) 田辺子男他編, 前掲書 32), p.114. 『第一高等中学校一覧 明治 23-24 年』前掲書 24), p.288 (1891)
- 38) 田辺子男他編, 前掲書 32), p.115 (1978)
- 39) 同上
- 40) 同上
- 41) 同上
- 42) 『東京大学精神医学教室 120 年』新興医学出版, 東京, p.20 (2007)
- 43) 小澤舜次, 前掲書 30), p.47 (1975)
- 44) 田辺子男他編, 前掲書 32), p.314 (1978)
- 45) 『東京大学精神医学教室 120 年』前掲書 42), p.49 (2007)
- 46) 同上
- 47) 武智ゆり, 前掲書 29), p.30 (2011)
- 48) 同上
- 49) 同上, p.31 (2011)
- 50) 中西利八編, 前掲書 22), p.69 (2002)
- 51) 小澤舜次, 前掲書 30), pp.44-47 (1975)
- 52) 武智ゆり, 前掲書 29), p.31 (2011)
- 53) 同上
- 54) 山崎光夫『明治二十一年六月三日一鵬外「ベルリン写真」の謎を解く』講談社, 東京, p.139 (2012)
- 55) 同上
- 56) 同上, pp.8-10 (2012)
- 57) KHM52「ツグミ髭の王」, KHM15「ヘンゼルとグレーテル」, KHM105「蛇と鈴蛙の話」, KHM55「ルンベルシュティルツヒェン」, KHM50「いばら姫」, KHM153「星の銀貨」, KHM80「雌鶏の死」, KHM94「賢い百姓娘」,

- KHM3「マリアの子」, KHM117「わがままな子」, KHM151「ものぐさ3人兄弟」, KHM27「ブレーメンの音楽隊」, KHM1「蛙の王さま」, KHM53「白雪姫」, KHM83「幸せなハンス」の15話. 川戸道昭・野口芳子・榊原貴教編「グリム童話翻訳文学年表1 明治編」『日本におけるグリム童話翻訳書誌』ナグ出版センター, 東京, pp.141-147 (2000)
- 58) 山崎光夫, 前掲書 54), pp.16, 137 (2012)
- 59) 同上, p.139 (2012)
- 60) 小澤舜次, 前掲書 30), p.6 (1975)
- 61) 『京都薬科大学百年史』京都薬科大学, 京都, p.18 (1985)
- 62) 武内博『来日西洋人名事典』日外アソシエーツ, 東京, p.555 (1995)
- 63) 同上
- 64) 三好卯三郎「ルドルフ・レーマンと京都薬学事始」『薬史学雑誌』vol.22-1, p.3 (1989)
- 65) 『第一高等中学校一覽 明治19-20年』第一高等中学校, 東京, pp.56-61 (1887)
- 66) 『千葉大学医学部八十五年史』千葉大学医学部八十五周年記念会, 千葉, pp.490-491 (1964)
- 67) ジョン・Z・パワーズ著, 金久卓也他訳『日本における西洋医学の先駆者たち』慶応義塾大学出版会, 東京, p.245 (1998)
- 68) 同上, pp.260-262 (1998)
- 69) 上田信道『『少年文武』創刊号から見た中川霞城の業績』『翻訳と歴史』, ナグ出版センター, 東京, vol.6, p.4 (2001)
- 70) 1889年 KHM5「狼と7匹の子山羊」, 1890年 KHM53「白雪姫」, 1892年 KHM83「幸せなハンス」と KHM37「親指小僧」, 1893年 KHM27「ブレーメンの音楽隊」と KHM45「親指太郎の旅」の6話.
- 71) KHM69「ヨリンデとヨリンゲル」, KHM1「蛙の王様」, KHM25「7羽のカラス」の3話.
- 72) 川戸道昭・野口芳子・榊原貴教編「グリム童話翻訳文学年表1 明治編」前掲書 57), pp.130-135 (2000)
- 73) 『京都薬科大学百年史』, 前掲書 61), pp.25-26 (1985)
- 74) 同上
- 75) 同上, p.24 (1985)
- 76) 同上, pp.25-26 (1985)
- 77) 手塚竜磨『日本近代化の先駆者たち』吾妻書房, 東京, p.123 (1975)
- 78) 水野繁太郎・権田保之助共訳「雪姫、兄と妹」『ドイツ文学証書第2編』小川尚栄同, 東京(1909)
- 79) 呉博士伝記編集会『呉秀三小伝』創造出版, 東京, pp.13-15 (2001)
- 80) 呉健編『呉文聰』杏林舎, 東京, pp.79, 214 (1920)
- 81) 西口裕子「本邦初のグリム童話の翻訳絵本『ハツ山羊』とその影響を与えたとみられるドイツの挿絵について」『専修大学人文科学研究所月報』vol. 257, pp.17-33 (2012)
- 82) 呉健編, 前掲書 80), pp.70, 226 (1920)
- 83) 同上, p.151. ヨハン・エドゥアルド・ワッペウス著, 呉文聰訳『統計学論』博聞社, 東京(1889)
- 84) 1886年までに KHM5 を英訳している本: 1. Household Stories (Added ed. 1853), 2. Household Stories (Bogue ed.1857), 3. Matilda Davis, Home Stories (1855), 4. Grimm's Goblins (George Vickers ed. 1861), 5. Mrs. H. H. B. Paull, Grimms' Fairy Tales (1872), 6. Lucy Crane, Household Stories (1882), 7. Margaret Hunt, Grimm's, Household Tales (1884). 詳細は下記参照: Martin Sutton, *The Sin-Complex*. Kassel, Brüder Grimm-Gesellschaft, pp.311-312 (1996)
- 85) 川戸道昭, 前掲書 2), p.30 (2000)
- 86) 大川一司他「物価」経済新報社編『長期経済統計』経済新報社, 東京, pp.153-154, 243 (1967)
- 87) 川副佳一郎『日本ローマ字史』岡村書店, 東京, p.159 (1922)
- 88) 同上
- 89) 同上, p.64 (1922)
- 90) 同上, p.161 (1922)
- 91) 同上, p.160 (1922)
- 92) 同上, pp.57-58, 60 (1922)

(野口)

- 93) 富家素子「上田万年覚書」『新朝』新潮社, 東京, vol. 95-5, p.220 (1998)
- 94) 川副佳一郎, 前掲書 87), p.70 (1922)
- 95) 詳細は右記参照. 拙著『グリムのメルヒェン —その夢と現実』勁草書房, 東京, pp.140-143 (1994)
- 96) 同上, pp.151-156 (1994). 川戸道昭・野口芳子・榊原貴教編, 前掲書 2), pp.136-137 (2000)
- 97) 小関恒雄「御雇教師エルンスト・チーゲル I」『日本医史学雑誌』vol.27-2, p.114 (1981)
- 98) 『東京大学百年史』東京大学出版会, 東京, p.458 (1884)
- 99) 田辺子男他編, 前掲書 32), p.18 (1978)
- 100) 洪江保訳『西洋妖怪奇談』博文堂, 東京, p.218 (1891). 木村小舟訳『教育お伽噺』博文館, 東京, p.77 (1908)

受稿日 2015 年 9 月 17 日 受理日 2015 年 11 月 5 日

随伴性判断課題における「無関係性」の認知を規定する諸要因

北 口 勝 也
(武庫川女子大学文学部教育学科)

Determinants of Cognition of “irrelevance” in Contingency judgment task

Katsuya Kitaguchi

*Department of Education, School of Letters
Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663-8558, Japan*

abstract

Contingency judgment is assumed to play a central role in prediction, control, and explanation. Here, the author consider the situation that has no relationship between two discrete events. In such “irrelevant” situations, people often develop the belief that there is a positive contingency between the two events that are actually unrelated. The author review experiments that have been conducted on the contingency judgment in the irrelevant situation during the last 40 years. We discuss about critical factors embedded in the experimental situations to lead people over-estimate zero contingency.

1. はじめに

我々人間をとりまく環境は、多数の、そして多様な事象から構成されている。我々はこのような環境との相互作用なしには生きていくことができず、そのため環境内にある事象間の関係性を認知する能力は、生きていく上で必要不可欠であるといえる。これは人間に限ったことではなく、現在地球上に生きるすべての動物にとっても、環境内の事象間の関係性に関する知識は、生存を維持していく上で重要な意味を持つといえる。このような事象間の関係性を表わす概念として、心理学では「随伴性(contingency)」という概念が用いられてきた。

随伴性の認知または検出に関する研究は、ヒト以外の動物を被験体とした学習心理学の分野、とりわけ条件づけ(conditioning)の領域で研究が行われてきた。条件づけは学習場面に含まれる事象の種類によって古典的条件づけとオペラント条件づけに分類される。いずれも実験事態の中に含まれる事象の数が限られているので、随伴性を操作して動物に提示することが容易である。古典的条件づけにおいては、条件刺激(conditioned stimulus ; CS)と無条件刺激(unconditioned stimulus ; US)との随伴性が、またオペラント条件づけにおいては、反応と強化子との随伴性について、数多くの研究が行われてきた(北口, 1999 ; 2000)。一方、ヒトを研究対象とする場合、その研究領域は「随伴性判断(contingency judgment)」、「共変動の検出・評定(covariation detection/assessment)」、「人の道具的学習(human instrumental learning)」と呼ばれる。学習心理学の分野で研究された「迷信的行動」研究(例えば Skinner, 1948 ; 小野, 1990 など)や発達心理学的な観点からの研究(Inhelder & Piaget, 1958)に端を発し、社会心理学の流れからは、他者の行動傾向の推察や因果的解釈の過程についての理論、いわゆる帰属過程の理論(Kelley, 1973)が加わり、心理学の中でも多様な分野にまたがるトピックになっている(嶋崎, 1994)。

それらの研究の中でも特に事象間の随伴性が無い場面において実験参加者が事象間の「無関係性」を

どのように認知し、どのような行動をするのかに関して検討するのが本稿の目的である。無関係性事態での動物の学習に関しては北口(1999, 2000)において論考してきたが、本稿では、実験参加者の「無関係性」に関する認知を直接的に測定する随伴性判断課題を用いた研究を概観し、今後の研究の方向性を探りたい。

2. 随伴性の概念について

現実世界の中では無数の事象が複雑に関係しあって存在しているが、心理学における随伴性判断実験では、通常2値(存在する／存在しない)から成る2つの事象(あるいは反応と事象)間の関係を考える場合が多く、Fig.1に示すように2つの事象のそれぞれの値の共生起の数を表にしたいいわゆる随伴性テーブル(contingency table)を用いて要約的に表現する。Fig.1の左図は、巷間よく語られる迷信である「雨男(あるいは雨女)」を例として随伴性の概念を示したものである。各セルの数字は架空の頻度データであり、図上部の枠内にある文章(カバーストーリー)のように、左上のセルはA氏が参加した時に雨が降った回数、右上のセルはA氏が参加した時に雨が降らなかった回数、左下のセルはA氏が参加しなかった時に雨が降った回数、右下のセルはA氏が参加しなかった時に雨が降らなかった回数を示している。このような設定の下、随伴性は、次の2つの条件付き確率の組み合わせで示される。

- ① A氏が参加した時に雨が降った確率 (10/18, 約56%)
- ② A氏が参加しなかった時に雨が降った確率 (7/12, 約58%)

①が②より大きいケースを正の随伴性、逆に①が②より小さいケースを負の随伴性とよぶ。そして、両確率が等しい場合が「随伴性がない場面」であり、実験参加者が「無関係性」を判断する事態である。Fig.1の例では.56と.58となり、2つの確率にはほぼ差が無く、「A氏がイベントに参加することと雨が降ることは無関係である」といえる。

Fig.1の右図は、随伴性概念を一般化された形式で示した随伴性テーブルである。事象XおよびYのそれぞれの存在／不在に係る頻度をa, b, c, dと表現した場合、①②の確率は以下の①'と②'のようになる。

- ①' 事象Xが存在する場合に事象Yが存在する条件付き確率： $P(Y|X) = a / (a + b)$
- ②' 事象Xが存在しない場合に事象Yが存在する条件付き確率： $P(Y|noX) = c / (c + d)$

		晴 または曇		事象 Y	
		雨		存在	不在
A氏が参加	存在	10	8	a	b
A氏が不参加	不在	7	5	c	d

Fig.1 随伴性テーブル：上部囲み内はカバーストーリー、左図は「雨男」に関する頻度情報の例、右図は事象XおよびYに関して一般化された随伴性テーブル

①' と②' の確率は両方を併記することで随伴性を表現できるが、両者の差という単一の値によっても随伴性を表現することができる。一般的には①' から②' を引いた値を ΔP と呼び、正の値をとる場合に正の随伴性、負の値の場合には負の随伴性、そしてゼロの場合に随伴性が無い、すなわち 2 事象が無関係である事態であることを表現している。また、2 つの確率をそれぞれ縦軸と横軸にプロットし、随伴性を 2 次元平面上に表現したものが、Fig.2 の随伴性空間 (Rescorla, 1967; 北口, 1996a, 1996b) である。それぞれの軸は 0 から 1 までの数値をとり、原点から引いた対角線より上の領域が正の随伴性、下が負の随伴性を示し、2 つの確率が等しい対角線上が無関係性事態を示している。

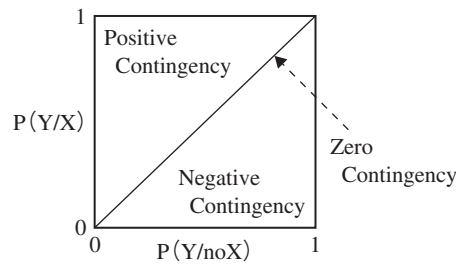


Fig.2 随伴性空間

3. 無関係性事態における随伴性判断を規定する要因

随伴性判断の典型的な実験においては、原因事象(実験参加者が観察できる事象あるいは実験参加者自身の反応)と結果事象がある随伴条件の下で提示され、被験者は観察の結果として検出した随伴性を何らかの次元上に評定することを求められる。その際の随伴情報の提示方法や評定の方法などによって様々なバリエーションが考案されている(嶋崎・津田・今田, 1988; Matute et al., 2015)。原因事象と結果事象とが無関係である場合、実験に含まれる様々な要因によって、被験者が正確にその随伴性を判断できるか否かについて矛盾する実験結果が生じることがわかってきた。すなわち、無関係性事態であることが正確に判断されたという結果 (Neunaber & Wasserman, 1986; Wasserman, 1990; Wasserman et al., 1993) がある一方で、正確には判断されない場合があるという結果 (Table1 参照) も存在するのである。Matute et al. (2015) は、無関係性の認知を左右するものとして、Table1 にまとめた 9 つの要因を指摘している。以下に、その分類に従って、従来の研究を概観する。

Table 1. 随伴性判断課題を用いた無関係性認知に影響する要因 (Matute et al. 2015) を元に作成)

	要因	無関係性の判断	代表的研究
1	結果事象の密度	高→正の随伴性	Alloy & Abramson (1979), Shanks (1985a)
2	原因事象の密度	高→正の随伴性	Allan & Jenkins (1983), Wasserman et al. (1996)
3	原因事象と結果事象の共生起数	高→正の随伴性	Jenkins & Ward (1965), Crocker (1982)
4	実験参加者の態度	結果事象を増やしたい→正の随伴性	Matute (1996)
5	反応のコスト	高→正の随伴性	Blanco et al. (2014)
6	実験参加者の抑うつ傾向	高→随伴性ゼロ	Alloy & Abramson (1979)
7	実験参加者の関与度	高→正の随伴性	Alloy et al. (1985)
8	複数の原因事象による競合	事象に関する経験によって変わる	Dickinson et al. (1984), Shanks (1985b)
9	事象の嫌悪性	高→正の随伴性	Matute (1995), (1996), Tomarken, Mineka, & Cook (1989)

(1) 結果事象の密度

無関係性認知をゆがめる要因としては最もよく知られたもので、「密度バイアス」と呼ばれている (Allan & Abramson, 1979 ; Allan & Jenkins, 1980, 1983 ; Shanks, 1985a ; Matute, 1996 ; Wasserman et al., 1996 ; Buchner et al., 2003 ; Allan et al., 2005 ; Musca et al., 2010). 結果事象の提示密度が高い場合には正の方向に、低い場合には負の方向にバイアスがかかることが知られている。

例えば、Shanks (1985a)は、実験参加者に新しく開発された砲弾の有効性(砲弾の発射(X)と戦車の爆発(Y)との随伴性)を判断させるという課題を与えた。その際、実験参加者はボタンを押すことによって砲弾を発射させることができた。実験参加者内要因計画により、正の随伴性条件($P(Y|X) = 0.75$, $P(Y|noX) = 0.25$)、負の随伴性条件($P(Y|X) = 0.25$, $P(Y|noX) = 0.75$)、結果事象の生起頻度が異なる2種類の無関係条件($P(Y|X) = P(Y|noX) = 0.75$, $P(Y|X) = P(Y|noX) = 0.25$)が設定された。その結果、正および負の随伴性条件では、実際に経験した随伴性にほぼ等しい判断が得られたが、2種類の無関係条件では実際の随伴性から逸脱した評定値が得られた。実験参加者は、結果事象の密度が高い無関係条件では正の随伴性があるかのごとく判断し、逆に低い場合には負の随伴性があるかのごとく判断したのである。さらに彼の実験では、5試行毎の評定の推移を検討しており、その結果、結果事象の密度が高い場合の無関係事態において見られる正のバイアスは、試行の進行と共に消失し、最終的にはほぼ正確な無関係性の認知ができることが示された。

(2) 原因事象の密度

原因密度(頻度)バイアスとよばれる現象で、無関係性事態における随伴性を高めに評定する傾向は、原因事象の頻度が高ければ高いほど、大きくなる (Allan & Jenkins, 1983 ; Wasserman et al., 1996 ; Perales et al., 2005 ; Matute et al., 2011 ; Vadillo et al., 2011 ; Blanco et al., 2013 ; Yarritu et al., 2014)。

例えば、Vadillo et al. (2011)は、実験参加者に火星から来たエイリアンにとってのニンジンの毒性(ニンジンを食べさせること(X)と病気になること(Y)との随伴性)を判断させるという課題を与えた。実験参加者間でニンジンを食べさせる頻度は異なっており、80%条件の方が20%条件よりも正の随伴性があると評定した。

(3) 原因事象と結果事象の共生起数

「セル a バイアス」と呼ばれる現象で、Fig.1 の随伴性テーブルの4つのセルのうち、2事象がともに存在するセル a (事象 X が生じて事象 Y も生じたケース)の頻度が高ければ高いほど、無関係性事態における正の随伴性認知が促進される (Jenkins & Ward, 1965 ; Crocker, 1982 ; Kao & Wasserman, 1993 ; Blanco et al., 2013)。これはよく知られた現象で、2つの事象が連続して生じた時には、時間的に先行した事象が後続事象の原因であると認知される傾向がある (e.g., Shanks et al., 1989 ; Wasserman, 1990 ; Lagnado & Sloman, 2006)。例えば Blanco et al. (2013)は、架空の薬物と架空の病気との間の随伴性を実験参加者に評定させる課題において、原因事象と結果事象の両方の高低を操作した。その結果、2つの要因の間には有意な交互作用が見られ、原因事象と結果事象ともに高い条件、すなわち原因事象と結果事象の共生起数が多い条件で、無関係性事態における正の随伴性認知が見られた。

(4) 実験参加者の態度

Matute (1996)は、実験参加者への教示によって、因果性の錯誤が生じやすくなることを明らかにした。結果事象が得られることを最大化するように求める教示条件では、無関係性事態における正の随伴性認知がかなり高く観察された。一方、「分析者」として原因事象の予測力を判定するように求める条件では、上記のような因果性の錯誤は生じなかった。ただし、前者の効果は実験参加者が原因事象を数多く要求したことによる、原因密度バイアスであると説明されている。

(5) 反応のコスト

反応することに付随していわゆる「副作用」があり、原因事象である反応を行うことによって実験参加者に不利益が生じるような設定にした場合、無関係事態における随伴性認知が正確になる。Blanco et al. (2013)は、新しく開発された薬に副作用がある場合とない場合を設定し、反応にコストが伴う場合に、因果性の錯誤が強くなることを確かめた。

(6) 実験参加者の抑うつ傾向

抑うつ傾向が高い実験参加者は、低い者に比べて、相対的に無関係性を正確に評定する。つまり、抑うつ者はより悲観的な認知のせいで抑うつ状態になるわけではなく、むしろ健常者の方が楽観的な認知を行うことで精神的健康を保っているのである。「抑うつ者のリアリズム (depressive realism)」として知られているこの古典的研究 (Alloy & Abramson, 1979)は、その他の研究者によっても繰り返し確かめられている (e.g., Moore & Fresco, 2012 ; Kornbrot et al., 2013 ; Byrom et al., 2015)。健常者によく見られる自己奉仕バイアス (self-serving bias) が原因であるとする動機づけに焦点を当てた説明 (Alloy & Abramson, 1988 ; Taylor & Brown, 1988, 1994 ; Alloy & Clements, 1992) が従来なされてきたが、近年、随伴性テーブルのセル c (原因事象が存在しないケース) に注目できるという抑うつ者の認知的特性に焦点をあてた説明 (Msetfi et al., 2005) も提出されている。

(7) 実験参加者の関与度

Alloy et al. (1985)は、原因事象が実験参加者自身の反応である条件と中性的な事象である条件において、無関係性事態での随伴性判断を比較した。正の随伴性への偏った判断が見られるのは、実験参加者自身の反応と結果事象との随伴性を評定させる条件であり、主に前述の自己奉仕バイアスで説明されている。つまり一般に人間には自分で行ったことに価値を高く置く傾向があり、その反応と結果との関係を高く見積もるという説明である。

(8) 複数の原因事象による競合

ヒト以外の動物を用いた古典的条件づけにおいては、条件刺激として複数の刺激を提示した場合に、それらの刺激の間で隠蔽 (overshadowing) や阻止 (blocking) などの相互作用が生じることが知られている。これらの手がかり競合 (cue competition) 現象は伝統的に学習心理学の「連合理論」 (e.g., Rescorla & Wagner, 1972) を用いて説明されてきたが、Dickinson と Shanks はこの理論を人間の随伴性判断にも援用し、同様の現象がみられることを予測し (Dickinson et al., 1984 ; Shanks, 1985b)、実際に実験で証明してきた (Shanks & Dickinson, 1987 ; Shanks, 2007)。

(9) 事象の嫌悪性

北口・嶋崎・今田 (1997) は、結果事象の感情価に注目し、低周波治療器からの嫌悪刺激を結果事象とした場合と、コンピュータのビーブ音 (中性刺激) を結果事象にした場合とを比較した。ディスプレイ上に現れる予告刺激とその後に到来する結果事象との間の随伴性を評定させた結果、嫌悪刺激を用いた場合にのみ、無関係事態における顕著なバイアスが観察された。また、Tomarken, Mineka, & Cook (1989) は原因事象の感情価に注目し、電気ショックに先行するクモやヘビなどの写真 (恐怖関連刺激) と花やきのこ等の写真 (恐怖無関連刺激) との間の随伴性を評定させた。その結果、恐怖関連刺激を用いた場合の方が無関係事態における正のバイアスが大きいたことが明らかにされた。同様の結果は近年の研究でも明らかにされており、嫌悪刺激に対する反応頻度の高さから説明がなされている (Matute, 1995, 1996 ; Blanco & Matute, 2015)。

4. まとめと今後の展望

以上、随伴性判断課題における無関係性認知に影響する要因を述べてきたが、ここにあげたものの他にも、随伴情報の提示方法や随伴性の評定方法なども、結果に大きな影響を及ぼすことが知られている(津田・嶋崎・今田, 1988)。また、多くの実験では原因事象と結果事象の提示に際して、実験参加者がイメージしやすいようにカバーストーリーがつけられている。例えば、砲弾の有効性(e.g., Shanks, 1985a), 医療と健康(e.g., Matute et al., 2011), 市場と株価(Chapman & Robbins, 1990), 食物とアレルギー反応(Wasserman et al., 1996), 植物と毒性(Cobos et al., 2007)などである。このカバーストーリーも結果に影響を持っており、その影響は Table1 にあげた要因のいずれかに関係していることが多い。

このように、随伴性判断課題を用いて無関係性に対する認知を検討する場合には多くの要因を考慮しなければならない。それらの要因は独立したものではなく、交絡していることも多い。今後、事象間の無関係性に対する人間の認知メカニズムを明らかにしていくためには、本稿で概観した要因の再整理をして研究を計画することが必要であろう。無関係性の認知は、学習性無力感現象(Seligman, 1975)に代表される動機づけの問題にも関係しているため、今後の医療や教育の発展に貢献することができる。本稿をその端緒としたい。

引用文献

- 1) Allan L. G., & Jenkins H. M. (1980). The judgment of contingency and the nature of the response alternatives. *Canadian Journal of Experimental Psychology*, 34, 1-11.
- 2) Allan L. G., & Jenkins H. M. (1983). The effect of representations of binary variables on judgment of influence. *Learning and Motivation*, 14, 381-405.
- 3) Allan L. G., Siegel S., & Tangen J. M. (2005). A signal detection analysis of contingency data. *Learning and Behavior*, 33, 250-263.
- 4) Alloy L. B., & Abramson L. Y. (1979). Judgment of contingency in depressed and nondepressed students: sadder but wiser? *Journal of Experimental Psychology: General*, 108, 441-485.
- 5) Alloy L. B., & Abramson L. Y. (1988). "Depressive realism: four theoretical perspectives," in L. B. Alloy (Ed.) *Cognitive Processes in Depression*, New York, NY: Guilford University Press.
- 6) Alloy L. B., & Clements C. M. (1992). Illusion of control: invulnerability to negative affect and depressive symptoms after laboratory and natural stressors. *Journal of Abnormal Psychology*, 101, 234-245.
- 7) Alloy L. B., Abramson L. Y., & Kossman D. A. (1985). "The judgment of predictability in depressed and nondepressed college students," In F. R. Brush, J. B. Overmier (Eds.), *Affect, Conditioning, and Cognition: Essays on the Determinants of Behavior*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum. Pp.229-246.
- 8) Blanco F., & Matute H. (2015). Exploring the factors that encourage the illusions of control: the case of preventive illusions. *Experimental Psychology*, 62, 131-142.
- 9) Blanco F., Matute H., & Vadillo M. A. (2013). Interactive effects of the probability of the cue and the probability of the outcome on the overestimation of null contingency. *Learning and Behavior*, 41, 333-340.
- 10) Buehner M. J., Cheng P. W., & Clifford D. (2003). From covariation to causation: a test of the assumption of causal power. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory and Cognition*, 29, 1119-1140.
- 11) Byrom N. C., Msetfi R. M., & Murphy R. A. (2015). Two pathways to causal control: use and availability of information in the environment in people with and without signs of depression. *Acta Psychologica*, 157, 1-12.
- 12) Chapman G. B., & Robbins S. J. (1990). Cue interaction in human contingency judgment. *Memory and Cognition*, 18, 537-545.
- 13) Cobos P. L., López F. J., & Luque D. (2007). Interference between cues of the same outcome depends on the causal interpretation of the events. *Quarterly Journal of Experimental Psychology*, 60, 369-386.

- 14) Crocker J. (1982). Biased questions in judgment of covariation studies. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 8, 214–220.
- 15) Dickinson A. Shanks D. R. & Evenden J. L. (1984). Judgment of act-outcome contingency: The role of selective attribution. *Quarterly Journal of Experimental Psychology*, 36B, 29–50.
- 16) Inhelder B. & Piaget J. (1958). *The Growth of Logical Thinking from Childhood to Adolescence*. London: Routledge and Kegan Paul.
- 17) Jenkins H. M., & Ward W. C. (1965). Judgment of contingency between responses and outcomes. *Psychological Monograph*, 79, 1–17.
- 18) Kao S. F., & Wasserman E. A. (1993). Assessment of an information integration account of contingency judgment with examination of subjective cell importance and method of information presentation. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory and Cognition*, 19, 1363–1386.
- 19) Kelley, H. H. (1973). The process of causal attribution. *American Psychologist*, 28, 107–128.
- 20) 北口勝也(1996a). 古典的条件づけにおける典にランダムな統制手続き(TRC 手続き)をめぐる諸問題. 心理学評論, 39, 224–251.
- 21) 北口勝也(1996b). 古典的条件づけにおける随伴性の指標 —Granger & Schlimmer (1986)の理論を中心に—. 関西学院大学人文論究, 45, 129–148.
- 22) 北口勝也(1999). 「無関係」という関係に関する実験心理学的考察. 関西学院大学文学部博士学位請求論文(未公刊).
- 23) 北口勝也(2000). 無関係性事態における動物の学習と行動. 動物心理学研究, 50, 1–11.
- 24) 北口勝也・今田寛(1998). 人間は「無関係」という関係を学習できるか? 関西学院大学人文論究, 47, 98–115.
- 25) 北口勝也・嶋崎恒雄・今田寛(1997). 随伴性判断課題における結果事象の感情価の効果. 日本心理学会第 61 回大会発表論文集.
- 26) Kornbrot D. E., Msetfi R. M., Grimwood M. J. (2013). Time perception and depressive realism: judgment type, psychophysical functions and bias. *PLoS ONE* 8:e71585.
- 27) Lagnado D. A., & Sloman S. A. (2006). Time as a guide to cause. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory and Cognition*, 32, 451–460.
- 28) Matute H. (1995). Human reactions to uncontrollable outcomes: further evidence for superstitions rather than helplessness. *Quarterly Journal of Experimental Psychology*, 48, 142–157.
- 29) Matute H. (1996). Illusion of control: detecting response-outcome independence in analytic but not in naturalistic conditions. *Psychological Science*, 7, 289–293.
- 30) Matute H., Blanco F., Yarritu I., Díaz-Lago M., Vadillo M. A. & Barberia I. (2015). Illusions of causality: how they bias our everyday thinking and how they could be reduced. *Frontiers in Psychology*, 6, 888.
- 31) Matute H., Yarritu I., & Vadillo M. A. (2011). Illusions of causality at the heart of pseudoscience. *British Journal of Psychology*, 102, 392–405.
- 32) Moore M. T., & Fresco D. M. (2012). Depressive realism: a meta-analytic review. *Clinical Psychology Review*, 32, 496–509.
- 33) Msetfi R. M., Murphy R. A., Simpson J., & Kornbrot D. E. (2005). Depressive realism and outcome density bias in contingency judgments: the effect of the context and inter-trial interval. *Journal of Experimental Psychology: General*, 134, 10–22.
- 34) Musca S. C., Vadillo M. A., Blanco F., & Matute H. (2010). The role of cue information in the outcome-density effect: evidence from neural network simulations and a causal learning experiment. *Conn. Sci.* 20, 177–192.
- 35) Neunaber D. J., & Wasserman E. A. (1986). The effects of unidirectional versus bidirectional rating procedure on college students' judgments of response-outcome contingency. *Learning and Motivation*, 17, 162–179.
- 36) 小野浩一(1990). 人間および動物の迷信行動. 行動分析学研究, 5, 1–44.
- 37) Perales J. C., Catena A., Shanks D. R., & González J. A. (2005). Dissociation between judgments and outcome-expectan-

- cy measures in covariation learning: a signal detection theory approach. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory and Cognition*, 31, 1105–1120.
- 38) Rescorla, R. A. (1967). Pavlovian conditioning and its proper control procedures, *Psychological Review*, 7, 71–80.
 - 39) Rescorla R. A., Wagner A. R. (1972). “A theory of Pavlovian conditioning: variations in the effectiveness of reinforcement and nonreinforcement,” In A. H. Black & W. F. Prokasy (Eds). *Classical Conditioning II: Current Research and Theory*. New York: Appleton-Century Crofts. Pp. 64–99.
 - 40) Seligman, M. E. P. (1975). *Helplessness*. San Francisco: W, H, Freeman
 - 41) Shanks D. R. (1985a). Continuous monitoring of human contingency judgment across trials. *Memory and Cognition*, 13, 158–167.
 - 42) Shanks D. R. (1985b). Forward and backward blocking in human contingency judgment. *Quarterly Journal of Experimental Psychology*, 37B, 1–21.
 - 43) Shanks D. R. (2007). Associationism and cognition: human contingency learning at 25. *Quarterly Journal of Experimental Psychology*, 60, 291–309.
 - 44) Shanks D. R., Dickinson A. (1987). “Associative accounts of causality judgment,” In G. H. Bower (ed.), *The Psychology of Learning and Motivation*, 21, San Diego, CA: Academic Press. 229–261.
 - 45) Shanks D. R., Pearson S. M., Dickinson A. (1989). Temporal contiguity and the judgment of causality by human subjects. *Quarterly Journal of Experimental Psychology*, 41B, 139–159.
 - 46) 嶋崎恒雄(1994). 随伴性の判断:動物の研究とヒトの研究を結ぶもの. 磯博行・杉岡幸三(編)情動・学習・脳(Pp. 115–138). 二瓶社.
 - 47) 嶋崎恒雄・津田泰弘・今田寛(1988). 随伴性の判断Ⅰ:随伴性の概念と実験事態の分類. 関西学院大学人文論究, 38, 47–66.
 - 48) Skinner, B. F. (1948). “Superstition” in the pigeon. *Journal of Experimental Psychology*, 38, 168–172.
 - 49) Taylor S. E., & Brown J. D. (1988). Illusion and well-being: a social psychological perspective on mental health. *Psychological Bulletin*, 103, 192–210.
 - 50) Taylor S. E., & Brown J. D. (1994). Positive illusion and well-being revisited: separating fact from fiction. *Psychological Bulletin*, 116, 21–27.
 - 51) Tomarken A. J., Mineka S., & Cook M. (1989). Fear-relevant selective associations and covariation bias. *Journal of Abnormal Psychology*, 98, 381–394.
 - 52) 津田泰弘・嶋崎恒雄・今田寛(1988). 随伴性の判断Ⅱ:随伴性判断の過程. 関西学院大学人文論究, 38, 83–104.
 - 53) Vadillo M. A., Matute H., & Blanco F. (2013). Fighting the illusion of control: how to make use of cue competition and alternative explanations. *Universal Psychology*, 12, 261–270.
 - 54) Vadillo M. A., Musca S. C., Blanco F., Matute H. (2011). Contrasting cue-density effects in causal and prediction judgments. *Psychonomic Bulletin and Review*, 18, 110–115.
 - 55) Wasserman E. A. (1990). “Detecting response-outcome relations: toward an understanding of the causal texture of the environment,” In G. H. Bower (ed.), *The Psychology of Learning and Motivation*, 26, San Diego, CA: Academic Press. Pp. 27–82.
 - 56) Wasserman E. A., Elek S. M., Chatlosh D. L., Baker A. G. (1993). Rating causal relations: role of probability in judgments of response-outcome contingency. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, And Cognition*, 19, 174–188.
 - 57) Wasserman E. A., Kao S.-F., Van Hamme L. J., Katagari M., Young M. E. (1996). “Causation and association,” In G. H. Bower (ed.), *The Psychology of Learning and Motivation*, 34, San Diego, CA: Academic Press. Pp. 207–264.
 - 58) Yarritu I., Matute H., Vadillo M. A. (2014). Illusion of control: the role of personal involvement. *Experimental Psychology*. 61, 38–47.

Kestenberg Movement Profile 理解のための動きの実体験に基づく教材研究

崎 山 ゆかり
(武庫川女子大学文学部教育学科)

A Study of Teaching Materials based on Movement Experiences for understanding Kestenberg Movement Profile

Yukari Sakiyama

*Department of Education, School of Letters
Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663-8558, Japan*

Abstract

Kestenberg Movement Profile (KMP) is said to be a great tool for analyzing human movement from a psychodynamic and developmental point of view in dance/movement therapy. The author has finished all of the intensive courses for the level one certification and is now a qualified KMP Certified Analyst. This study focuses on its introductory course, which consists of theoretical and practical parts with numerous reflections and discussions. In particular, the structure of the 30-hour KMP introductory course has four parts. They are; theoretical understanding through lectures or reading references, observing various movement through movie clips, experiencing various movements of KMP elements, and verbalizing what and how participants feel via feedback. The circulation of the four parts is indispensable for understanding KMP. In addition, through these experiences, the importance of movement experiences was a clear focus. These movements are a core aspect of the circulation.

For further study of KMP in Japan, a development of teaching materials for practical movement experiences is required. Beyond the gaps of English-Japanese translation of technical terms, we need various devices for inducing KMP movements. Especially, cards written in English and Japanese of technical terms of KMP, color cubes of each movement pattern or dice of each movement quality, and edited music for inspiring Tension Flow Rhythm and Tension Flow Attributes are indispensable. Pictures of various movements by recognizing Shape Flow patterns will be also useful. Comparing movements with match and mismatch, scripts for play will be supportive for understanding each difference. The materials will be utilized for Japanese KMP students for the next step.

1. はじめに

これまで筆者は、ダンス・ムーブメントセラピーなどで用いられる精神力動的な発達段階を枠組とした運動分析法である Kestenberg Movement Profile (KMP)¹⁾について、大橋の先行研究^{2) 3)}をふまえ、KMP 文献の訳出⁴⁾、KMP 理論の枠組を図示した色別輪形図の日本語版の作成^{註1)}、オノマトペによる関連する動きのイメージ把握⁵⁾など、日本語による KMP 理解に取り組んできた。さらに、その応用方法を探る中で、身体的共感との関連⁶⁾や記譜や分析の実態⁷⁾を明らかにして、KMP の可能性をさまざまな角度から探ってきた。KMP は、2つのサブシステムに大別された9つのカテゴリーから構成され、合計 62 の分析項目が、さらに 120 の動きに細分化された複雑なツールである。そのため KMP の習得

には多くの時間と労力を要し、日本における KMP 学習には課題が多いのが現状である。

筆者は、2014 年 8 ～ 10 月に KMP の集中講座の全てのカリキュラムに参加する機会に恵まれたのを機に、2015 年 8 月に KMP 分析家(KMP Certified Analyst)資格を取得した。この学びの過程で、実際にカテゴリーごとに区分された分析項目の動作を何度も繰り返し体験したことで、KMP のさまざまな動きやその違いの理解につながった。このような動きの実体験は、運動分析の理論や技法を理解する上で不可欠なものであり、集中講座では動きの体験を身体感覚として根付かせるために、多様な工夫がなされていた。また、筆者にとっては母国語と異なる言語での学習のため、KMP 習得のためにはビデオによる復習が必須であり、関係者の同意を得て全課程をビデオによる記録として残すことができた。

本研究では、これらの体験を元に KMP の入門コース 30 時間を映像、記録、配布資料、提出したレポートなどの資料から振り返り、カリキュラムの構造を明らかにする。特に実技内容に着目し、日本語での KMP の学びに必要な教材とは何かを考察し、今後日本での KMP 学習に活用しうる教材研究を行うことを目的とする。

2. KMP 入門コースの内容と学びのための基礎知識

KMP 入門コースは、Table1 に示したレベル I の分析家資格の全 90 時間のカリキュラムの中の最初の 30 時間に該当し、全項目の内容理解と臨床応用への契機となることを主眼に構成されている。

Table 1 Curriculum of Level I for KMP Analyst Certification

学習目標	発達段階に沿って心理学的視点を持ちながら、さまざまな動きを体験し、認知し、記譜し、解釈する。
到達目標	動きには本人の嗜好性や文化性が影響することを理解し、発達の側面を理解しながら、非言語的分析ツールである KMP が使えるようになる。
学習時間	Level I はのべ 90 時間を要し、30 時間毎に 3 つの枠組で構成される。
3 つの枠組	<ol style="list-style-type: none"> 1. KMP の全項目の概要の理解と項目ごとの観察 2. テンションフローリズム、両極性シェイプフロー、単極性シェイプフローの理解と記譜、データに基づくグラフ化及びその解釈 3. テンションフロー特性、前駆エフォート、エフォート、方向性シェイプ、面性シェイプ、および身体的特徴の理解と記譜、データに基づくグラフ化及びその解釈
課 題	<p>期間中 3 回の宿題(プレゼンテーションを含む)と枠組毎に以下の課題レポート提出。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. KMP 全項目の観点からのビデオ観察に基づく幼児の観察レポート 2. ビデオ観察に基づく幼児の 3 項目分析をまとめたグラフ作成とその解釈のレポート 3. 提出済みの 3 項目を含む全項目のグラフ作成とその解釈及びセラピストの立場からの助言 <p>30 時間毎の各講習修了後の指定された期日までに提出する。特に最終レポートは、その分析結果の妥当性の審査を受け、必要に応じて手直しや新たな課題を提出し、合格者に Level I の資格が授与されることとなる。</p>
主な使用テキスト	<ul style="list-style-type: none"> ・ Kestenberg-Amighi, J. & Loman, S., The Meaning of Movement Developmental and Clinical Perspectives of the Kestenberg Movement Profile, Amsterdam: Gordon and Breach Publishers, pp.1-307 (1999) ・ TRAINING MANUAL FOR THE KESTENBERG MOVEMENT PROFILE The Sand Point Movement Study Group Child Development Research 2008 Revised by Loman, S. Antioch University ・ Kestenberg, J. Children and Parents Psychoanalytic Studies in Development Jason Aronson, Inc, pp.157-170 (1975) <p>*その他担当者によって適宜数本の論文が追加される。</p>

今回筆者が修了した入門コースのシラバスに記された到達目標とコースの概要をまとめたものが、次の Table 2 である。この入門コースでは、講習で学んだことの理解を深めるため、講習期間中は毎日人の動きの観察やその結果についてのプレゼンテーションなど、課題が課せられていた。30 時間修了後の幼児の分析レポートの提出に関しては、次に続く 60 時間の記譜の講習に参加し、所定の単位を必要とする者に限定されていた。なお、この入門コースはダンス・ムーブメントセラピストの養成大学院に

おける 15 週間にわたって実施される KMP の授業と同等の内容である。

Table 2 Learning Objectives and Course Outline of KMP Introductory Course

到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ KMP に含まれる動きのパターンに親しみ、どのように発達が進んでいくかを理解し、さらにそれぞれの動きのパターンの心理学的重要性を理解する。 ・ KMP 独自の概念を把握し、応用できるようになるために理論的な枠組を理解する。 ・ (評価、治療計画、介入、治療の進展の評価などにおいて) KMP を臨床に活かせるようになる足がかりをつける。
概要	<ol style="list-style-type: none"> 1. KMP 紹介と基本概念の理解 2. テンションフローエフォートシステム：動きの感情と実態 3. シェイプフローシェイピングシステム：動きのフォームと構造 4. 各システムの復習と統合(調和または衝突する動きの要素の関係性) 5. KMP の臨床応用

このような KMP のコースでは、Laban⁸⁾や Lamb&Watson⁹⁾などの運動分析の基本知識についての説明は含まれていない。講座は一般的な運動分析に関するエフォートやシェイプの専門用語を理解しているという前提から始まるのである。さらに、Freud, A. による児童精神分析の理論¹⁰⁾だけでなく、山崎¹¹⁾が指摘する Freud, A. 独自の女性の視点からの発達理解、さらに KMP を心理学の立場から支える Sossin による KMP 分析の動きの枠組と Freud, A. 理論の具体的な関係性¹²⁾など、KMP の独自性を理解するには、これらの基礎知識が不可欠である。特に、KMP 理論全般における発達の捉え方には特徴があり、Laban のエフォートの中の空間(Space)、重さ(Weight)、時間(Time)の 3 要素が、幼児の発達に沿って構成されている。Laban のエフォート要素の流れ(Flow)は、前述の 3 要素全てに関連する包括的な概念として捉えられている。これは、Laban のエフォートでは 4 つの要素がそれぞれ戦闘的(fighting)または陶酔的(indulging)という 2 項対立の概念で構成されている実態とは異なっている。さらに、Laban のシェイプの理論に関する水平・垂直・矢状(Horizontal/Vertical/Sagittal)の 3 つの面(Plane)については、使用される用語は一致するが、ここでも 3 つの面が幼児の発達年齢の順に構成され、その発達の時期に同期するものとして扱われている。そこで、Laban の理論と異なる動きの枠組について、KMP を学ぶための基礎知識として原語を併記してまとめたものが次の Table 3 である。

Table 3 Required Basic Knowledge on Movement Analysis and Development for KMP Study

エフォート Effort	自由な流れの要素 free flow	拘束された流れの要素 bound flow	該当する面 Planes	該当する発達年齢 Developmental years
空間 Space	蛇行 Indirect	直行 Direct	水平 Horizontal	0-1 歳
重さ Weight	軽 Lightness	重 Strength	垂直 Vertical	1-2 歳
時間 Time	<u>減速 Deceleration</u>	<u>加速 Acceleration</u>	矢状 Sagittal	2-3 歳

これらの基礎知識については、特にふれられないまま入門コースは始まっている。このことは、欧米などでダンス・ムーブメントセラピーを学ぶ場合、Laban などの運動分析の知識は必須であり、わざわざこの基礎知識にふれる必要はないためと考えられる。しかし日本の現状は異なり、欧米ほど Laban の運動分析の理論は定着しておらず、KMP 理解のためには、これらの基礎知識と Laban 理論との違いをしっかりとふまえておくことが必要であろう。さらに、KMP の分析項目におけるエフォートは、Laban のエフォートとは一部用語が異なっており、その違い(Table3 太い斜字体下線箇所)についても予め把握する必要がある。Laban の場合、時間については、時間をかけずに素早く動く場合－時間を引き延ばすようにじわっと動く、Quick-Sustained という用語が用いられている。このような Laban を基盤とし、かつ KMP 独自のエフォートとシェイプの関連を、学びのための基礎知識として事前に理解することが、KMP を学ぶ前提条件となるのである。

3. KMP 入門コースにおける動きの実体験とカリキュラムの構造

今回参加した 30 時間の入門コースは、1 日 7 時間半の 4 日間の連続講習であり、一般的な KMP の集中コースである。基本概念の理解のために、1 日毎に異なる文献の読破が課せられていた。しかしながら、このような運動分析を字面だけで理解するのは不可能であり、講師もそのことを十分に理解し、さまざまな動き取り入れていた。講習時には気づくゆとりすらなかったが、修了後ビデオによるレビューを行ったことにより、入門コース全体の実技の内容を振り返り、理解を深めることができた。

そこで、改めて 30 時間分の記録映像を全て掘り起こすと、全てのカテゴリーの学習で次のような構造でカリキュラムが構成されていたことが明らかになった。すなわち、文献を示しながらの理論解説、具体的動きの提示(ビデオ鑑賞)、分析項目の動きの体験、体験の振り返りである。カテゴリーによっては順序が前後する場合もあったが、これらの内容が常に織り込まれていた。特に筆者にとって動きの実体験は KMP の分析項目を身体感覚として理解できた貴重な体験であった。そこで、この動きの実体験の具体的内容と所要時間(受講生がフロアに移動し、講師の指示に従って実際に動いた時間)をまとめたものが次の Table4 である。このワークは 4 日間で 25 回に及び、実働時間は 2 時間 20 分を超えていた。加えてワーク後には、必ず動いたことによる気づきなどについて参加者同士で議論を時間をかけてじっくり行った。それらの議論を元に、講師との質疑応答を行うなど、動きの実体験から KMP 理論を身体感覚に根付かせて理解するための時間が常に設けられていた。なおこの時間については、動きそのものではないため Table4 の時間からは削除している。但し、No.17 のワークは、フロアでの実技ではなく示された映像を観察しながら、椅座位姿勢でその動きを感じる内容であったが、実際には画面上の動きをからだでミラーリングする場面も含まれていたため、実体験として位置づけた。

KMP の入門コースでは、このような多様な動きの実体験がカリキュラムの中に常に織り込まれていた。単なるからだを動かす実技ではなく、次の Fig.1 に示す複合的な学びの円環の中で、KMP の理論を学ぶこと、映像などの資料からその理論に基づく動きを観察すること、そして実際に生身のからだで受講生自身が動くこと、それを時には互いに観察し合うこと、さらに動きの体験を振り返り言語化して学んだ理論とつなげること、その過程で疑問が沸き起こればすぐに講師に質問をして問題解決を適宜図り、共に考えていくことが積み重なって KMP の理解へと発展していく構造がカリキュラムの根幹にあった。

Table 4 Contents of Movement Experiences in KMP Introductory Course

No.	KMP 項目	内容	時間
1	System1	free-bound の流れで動く	4:02
2	System2	growing-shrinking の流れで動く	5:42
3	TFR	テンションフローリズムの 10 のリズムで動く	9:35
4	TFR	10 種の音楽を用いてテンションフローリズムの 10 のリズムで動く	12:20
5	TFA	テンションフローリズムの 6 つの動きを free-bound-neutral で動く	8:30
6	TFA	テンションフロー特性の free の動きのみ用いて即興で動く	6:10
7	TFA	テンションフロー特性の bound の動きのみ用いて即興で動く	7:07
8	PreEffort	前駆エフォートの 6 つ動きを確認しながら動く	4:00
9	PreEffort	サークルダンスをいきなり踊り前駆エフォートを感じる	6:55
10	PreEffort	捕食動物対草食動物のロールプレイをする	3:12
11	Effort	台本に従い、さまざまな動物や人物や物体を演じる	11:20
12	BSF	両極性シェイプフローの 6 つの動きを確認する	8:15
13	USF	単極性シェイプフローの 10 の動きを確認する	4:07
14	SinD	音楽に合わせて方向性シェイプを用いて動く	4:00
15	SinP	音楽に合わせて面性シェイプを用いて動く	3:40

continued

16	System2	システム 2 の全ての動きを基本とした作品を創り発表する	5:22
17	SinD & SinP	ダンサーの多様な動きを観察しながら同時にそこに出現している方向性および面性シェイプを指摘する	8:00
18	TFR	1 種類の音楽を用いて 10 の TFR を用いて動く	9:20
19	System1 & 2	音楽を用いてシステム 1 & 2 の free-bound 及び growing-shrinking の違いを意識して動く	3:35
20	System1	音楽を用いてシステム 1 のすべての動きの free-bound-neutral を意識して動く	3:05
21	TFA & BSF	テンションフロー特性と両極性シェイプローの衝突する動きの組み合わせで動く	6:32
22	TFA & BSF	テンションフロー特性と両極性シェイプローの調和する動きと衝突する動きの組み合わせを対比しながら動く	7:35
23	PreEffort & SinD	前駆エフォートと方向性シェイプの調和する動きを用いた台本に沿って、お化け屋敷を探検するロールプレイを行う	3:15
24	PreEffort & SinD	前駆エフォートと方向性シェイプの衝突する動きを用いた台本に沿って、お化け屋敷を探検するロールプレイを行う	2:39
25	Effort & SinP	エフォートと面性シェイプの調和と衝突する動きの組み合わせを意識して動く	4:16

KMP 項目略号：TFR-Tension Flow Rhythm, TFA-Tension Flow Attributes, PreEffort-Precursors of Effort, BSF-Bipolar Shape Flow, USF-Unipolar Shape Flow, SinD-Shaping in Direction, SinP-Shaping in Planes

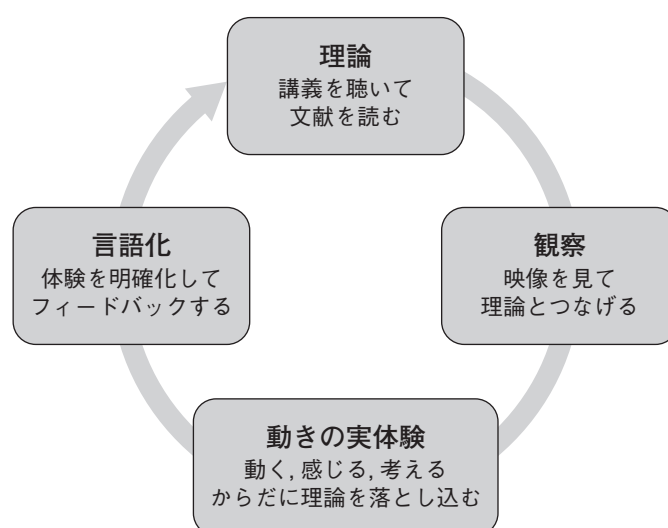


Fig.1 Circulation of Structure of KMP Introductory Course

とりわけ、この円環の中での動きの実体験と受講生同士の言語化によるフィードバックは、生身のからだでの動きの体験から成り立つものである。KMP の学びの時空間に同時に居合わせ、同等の基礎知識を持ち合わせた上で、動きや思いを共有できるため、机上の学びだけでは会得できない内容であろう。このように KMP を理解するためには、学びの円環が幾層にも積み重なり、からだを通した動きの実体験が螺旋状につながることが求められていた。そしてカリキュラムが、理論を学び観察で見える目を養い、動いて実感し言語化で理解を深めるという円環の中に構造化されていたのである。

4. KMP 教材の検討

KMP 入門コース 30 時間の内容について動きの実体験を中心に振り返ることにより、動きの体験をどのように KMP の学びに落とし込んでいくかという点が、最も重要であることが明らかとなった。特に日本語での学びにおいては、原語のままで理解の困難さと翻訳用語の難解さなど課題も多いため、動

きを豊富に経験して体感的に KMP の動きの要素や各項目の意図するところを理解していくことが求められる。そのためには、KMP の指導の際、ただ要素ごとの用語を伝え動くだけでなく、学びを深めるために、動きを伝えるための独自の教材が求められているように思う。その一方で運動分析の教材としては、Laban の舞踊記譜法では、すでにマルチメディア教材が用いられる¹³⁾などデジタル化が進んでいる。KMP においても記譜を学ぶためのシステム^{註2)}が開発されており、学習の効率化が図られている。

しかしながら、特に日本語で欧米から発展したこのような運動分析を学ぶ場合、動きをどのような枠組で捉えるのかという視点を、動きを通して理解する必要があることは言うまでもない。理論的枠組を離れ、学び合う者同士の動きの相互作用を引き出し、その動きの学びが個人内に終わることなく発展していく仕掛けとして、複数人で成立する動きの体験が組み込まれていることが求められる。そこには、ある種の遊びの要素があることで、学びを楽しみ動きを楽しみ心を動かし、その動きを共有し合う者同士の交流により、新たな学びへとつながることを意図したゲーム性のある教材が必要であろう。そこで、Table 4 に示した 25 種の動きの実体験をふまえ、KMP の分析項目とその項目を学ぶために必要な教材の、動きを楽しみ動きの共有で交流が図ることを意図した特性を項目毎にまとめ、Table 5 に示した。

Table 5 Favorable Features of Teaching Materials for KMP Understanding

KMP 項目	KMP の理解を促進させる教材の特性
TFR	10 種のテンションフローリズムが自由に組み合わせられて、他者と共に体験できるような指示
TFA	6 種のテンションフロー特性の動きが free-bound の区分と共に、自由に表現できる指示
Pre-Effort	前駆エフォートの項目の特性である不安を惹起し、新たな動きを学習するための場面設定
Effort	エフォートに示された 6 種の動きが複数に組み合わせられた体験が可能な動きを発する事物の例示
BSF	両極性シェイプフローの 6 種の動きを抽出できる写真や動きのイメージを引き出す視聴覚資料
USF	単極性シェイプフローの 10 種の動きを抽出できる写真や 10 種の動きが経験できる場面設定
SinD	方向性シェイプの 6 種の動きがイメージしやすい音楽、典型的な動きの映像、前駆エフォートと関連する動きが引き出せるロールプレイの台本
SinP	面性シェイプの 6 種の動きの典型的な映像、エフォートと関連する動きの場面設定
System1 & 2	Free-bound, growing-shrinking の対比がイメージしやすい異なる曲調の音楽

* KMP 項目略号は Table 4 と同じ

これらの特性を有するものとして、次の教材の作成を試みた。テンションフローリズムについては、10 種のリズムの用語を言語と日本語訳示したカード、およびこれらの動きがイメージできるオノマトペがかかれたカード(Fig.2)を作成した。これらのカードを組み合わせることにより、10 種のリズムだけでなく、これらのリズムが組み合わせられたミックスリズムを作り出すワークの指示が容易になると考えられる。またカードの組み合わせパターンも多様となり、同時に多くのリズム体験が可能である。

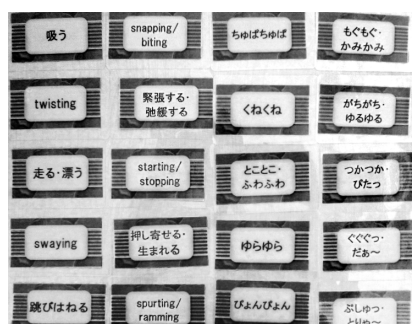


Fig.2 Tension Flow Rhythm Cards

テンションフロー特性、前駆エフォート、エフォート、両極性シェイプフロー、方向性シェイプ、面性シェイプの分析項目がそれぞれ6種ずつであることに着目し、紙製のサイコロを用いて、それぞれの面に動きの要素を書き入れた(Fig.3, 4)。さらに動きの関係性を明確化するために、サイコロ面の上下は、相対する動きの要素である free-bound, growing-shrinking となるように統一を図った。加えて、各サイコロがどの KMP 要素を示すのか、そのタイトルについてはサイコロの6面には明記せず、蓋の折りこみ部分に書きこむことで、用語を記憶するための一助とした(Fig.5)。10種の動きを有する単極性シェイプフローについては、垂直面と矢状面が4種ずつの動きであることをふまえ、同一面に2種類ずつ記載し、その整合性を図るようにした(Fig.6)。サイコロを振るというゲームの要素により、楽しみながら6面にかかれた全ての分析項目が示す具体的な動きの理解を促進させるものと思われる。

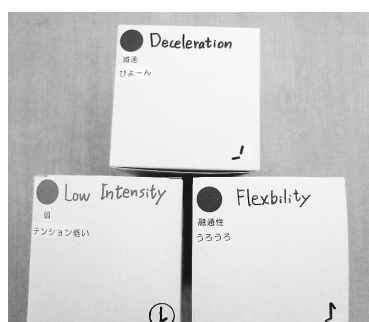


Fig.3 Paper Dices of Tension Flow Attributes, Precursors of Effort and Effort

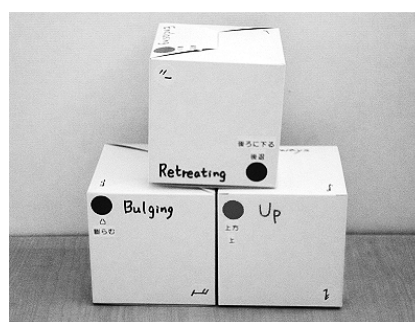


Fig.4 Paper Dices of Bipolar Shape Flow, Shaping in Direction and Shaping in Planes



Fig.5 Example of how to write a title on KMP Paper Dice



Fig.6 Paper Dice of Unipolar Shape Flow

テンションフローリズムと単極性シェイプフローを除く6つのKMP項目は、前述したように6種ずつの分析項目の動きから成り立っている。またこれら全ての動きは、水平・垂直・矢状の3面及び free-bound, growing-shrinking の2項対立の動きから成り立つ共通点がある。これらをより視覚化し、その関係性を明らかにしたものが、前述したKMP色別円形図である。この6種の動きの区分の色をTable 6に示すように統一して、色付きのキューブを用いた教材を作成した。この色付きキューブは、ピーンバッグと称される幼児向けの教材としてアメリカなどで市販されているものである。形はキューブ型、ボール型、ピラミッド型などがある。今回は原語を用いたものをキューブ型(Fig.7)、日本語を用いたものをボール型(Fig.8)とした。これらは、今後日本語でKMPを指導する際、実際の分析項目の動きを体験する場合やその動きを確認し理解するための教材として活用する予定である。

Table 6 Color List of KMP Elements of Six Factors

要素 区分	水平面 free-growing	水平面 bound-shrinking	垂直面 free-growing	垂直面 bound-shrinking	矢状面 free-growing	矢状面 bound-shrinking
色	橙	青	黄	紫	緑	赤

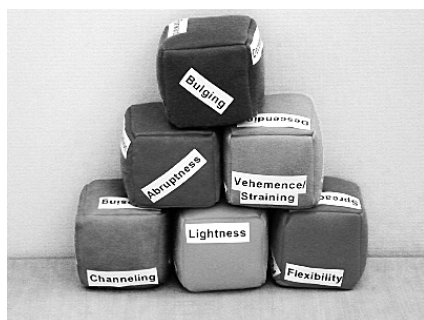


Fig.7 Color Cubes of KMP for the same elements written in English

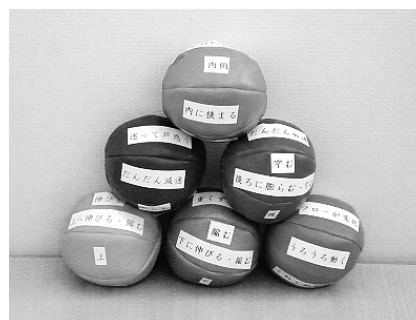


Fig.8 Color Ball of KMP for the same elements written in Japanese

さらに、テンションフローリズムの動きを誘発するような曲、どのリズムにも対応できる曲、free-bound や growing-shrinking などのフローの質の違いを意識できる曲などの選定、場面設定や特定の動きを引き出すことを意図した台本なども、動きを共に体験する教材として有用であろう。このような教材を用いて、学び合う者同士がロールプレイを楽しみ、その後動きを振り返ることにより、KMP 項目が示す動きの理解が促進される。また、本来の自然な動作とは異なる、調和せず衝突する動きが視覚的に捉えられるような動きを切り取った写真や映像なども、Fig.1 に示した円環の動きの観察からの学びを引き出す教材として活用できる。KMP の教材開発は、学びの円環の「観察」と「動きの実体験」に特化したものとして位置づけることが、日本語で運動分析を学ぶ際の理解を深める一助になると思われる。

5. おわりに

KMP は、欧米のダンス・ムーブメントセラピーの運動分析においても、難しく理論的であるという意見がある。この分析法を日本語で理解する困難さに向き合いながら、筆者自身ようやくその全容を動きで理解することが可能となった。今後日本語での KMP 理解を進めていくためには、筆者が体験したように動きの実体験が不可欠である。日本でダンス・ムーブメントセラピーを学びながらも、運動分析の重要性に欧米と温度差があるのは、これらの動きの実体験の欠如に起因している。多種多様な分析項目の動きを理解するための教材は、講師の経験値から生まれるものだけでなく、構造化され明確な狙いを持つことも必要と思われる。今後は、実際に日本語で KMP の指導を行う中で、参加者の運動分析の理解に応じた新たな教材開発も視野に入れ、実践を進めていきたい。

さらに教材そのものの検討だけではなく、その教材を取り入れた学びのカリキュラムをどのように組み立てていくのか、さらにスカイプなどを活用した学習プログラムを通じて遠隔地の受講生とどのように学び合うのかなどの新たな課題もある。そしてその先には、最も困難である KMP の記譜そのものを理解しその技法を会得し、動きのラベル化や数値の処理など、観察された動きをデータ化し臨床応用のための解釈を行うための KMP カリキュラムの検討が必要である。

文 献

- 1) Kestenberg-Amighi, J. & Loman, S., *The Meaning of Movement Developmental and Clinical Perspectives of the Kesten-*

- berg Movement Profile*, Amsterdam: Gordon and Breach Publishers, Amsterdam, pp.1-307 (1999)
- 2) 大橋さつき, ダンスセラピーにおける動作分析法の適用性, お茶の水大学人文科学紀要, **53**, pp.315-325 (2000)
 - 3) 大橋さつき, 共感する身体を探る —ダンスセラピーにおける Kestenberg Movement Profile 理論より—, お茶の水大学人文科学紀要, **54**, pp.223-232 (2001)
 - 4) Loman, S. & Sossin, K. M, Applying the Kestenberg Movement Profile in Dance/Movement Therapy: An Introduction, Edited by Sharon Chaiklin and Hilda Wengrower *The Art and Science of Dance/Movement Therapy Life is Dance*, Routledge, 2009 pp.237-264, 崎山ゆかり & 中めぐみ訳, ダンス・ムーブメントセラピーにおけるケステンバークムーブメントプロフィール(KMP)適用法入門, ダンスセラピー研究, **6**, pp.37-59 (2012)
 - 5) 崎山ゆかり, 中めぐみ, Kestenberg Movement Profile における運動分析専門用語の解釈に関する検討, 武庫川女子大学紀要人文科学編, **58**, pp.13-21 (2010)
 - 6) 崎山ゆかり, ケステンバーク・ムーブメント・プロフィール解題のための試論 —調律の概念に着目して— ダンスセラピー研究, **6**, pp.8-16 (2012)
 - 7) 崎山ゆかり, 中めぐみ, Kestenberg Movement Profile の記譜における学びの過程と分析対象者への調律に関する検討, 武庫川女子大学紀要人文科学編, **60**, pp.63-70 (2012)
 - 8) Laban, R., *The Mastery of Movement*, Macdonald & Evans, London, pp.1-181 (1960), 神澤和夫訳, 身体運動の習得, 白水社, 東京, 第4版, pp.1-247 (1990)
 - 9) Lamb, W. & Watson, E., *Body Code The Meaning in Movement*, Princeton Book Company, New Jersey, vol.2, pp.85-127 (1987)
 - 10) フロイト, A. 児童分析 教育と精神分析療法入門, 北見芳雄, 佐藤紀子訳, 誠信書房, 東京, pp.2-175 (1961)
 - 11) 山崎篤, アンナ・フロイト —その生涯と業績, 中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要, **44**, pp.95-102 (2012)
 - 12) Sossin, M. K., Metapsychological Considerations of the Psychologies Incorporated in the KMP System, Edited by Lewis, P. and Loman, S. *The KMP Its Past Present Applications and Future Directions*, Antioch New England Graduate School, New Hampshire, pp.101-113 (1990)
 - 13) 中村美奈子, 山川誠, 八村広三郎, 舞踊記譜法 Labanotation とモーションキャプチャを用いた舞踊教育のためのマルチメディア教材の開発, 情報処理学会人文科学とコンピュータ, **50** (5), pp.33-40 (2001)
- 註 1) KMP 分析上級指導者 Hastie, C. S. 作成の KMP Color Wheel. 許諾を得て崎山が 2010 年訳出.
- 註 2) ドイツにある欧州ダンスセラピーセンターのダンスセラピストで KMP 分析家の Susanne Bender らが開発したソフトウェア. ラバンの記譜記号も同時に学べ, 英・独・中国語の3ヵ国語対応.

受稿日 2015 年 9 月 17 日 受理日 2015 年 11 月 5 日

エンドオブライフにおける宗教の役割 —医療, 葬儀, 自助, 介護—

大 西 次 郎
(武庫川女子大学文学部 心理・社会福祉学科)

The Role of Religion at the End of Life: Health Care, Nursing and Welfare Services, Funeral Services, and Self-help Groups

Jiro Ohnishi

*Department of Psychology and Social Welfare, School of Letters
Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663-8558, Japan*

Abstract

Religious care and psychological therapy provided at the end-of-life share universal characteristics regardless of the framework of interpersonal support; however, they have different functions.

The field of support was divided into health care, nursing and welfare services, funeral services, and self-help groups according to the age of individuals who receive the care (patient or bereaved family) and those who have passed away (legitimacy or illegitimacy), and the role of religious practitioners was compared with that of psychological therapy.

Since religious beliefs cannot be applied to the care provided in the healthcare field, religious practitioners have problems identifying the values of religion within such care, apart from at hospices and Buddhist monasteries.

Although spiritual and religious care is ensured during funeral services, bereaved family-centered care needs to be re-established in response to the criticism over Buddhist funeral services.

Even in self-help groups in which people encourage and help each other, religious practitioners can help bereaved families come to terms with the death.

Nursing and welfare services can support elderly people who are prepared for their impending death by providing information and helping resolve problems through a religious view of life, including the interpretation of the present life and afterlife.

The activities of religious practitioners are cross-sectional, but they can be completed independently, suggesting the need to promote cooperation among religious practitioners, care receivers, and healthcare professionals.

1. 問題の所在

人の終末期を死という一時期にとどめず、生の延長線上に広げていくエンドオブライフ(ケア)という言葉が用いられるようになった。死に至るまでの人生へ向けた継続的な関わりが重視され、かつケアを生活の視点で捉えて、専門性にこだわらずインフォーマルな関係性にも配慮する穏当な概念である。

このエンドオブライフに展開される心理臨床は一枚岩でなく、目的や方法が担い手によって異なる。

そこで筆者は「ケアの対象(本人⇔遺族)」および「死者の年齢(条理⇔不条理)」の二つの軸を用いて心理療法家と、医療者、葬儀社、自助グループ、介護職それぞれとの協働の特質を示す4象限モデル(大西2015)を提起した(図)。

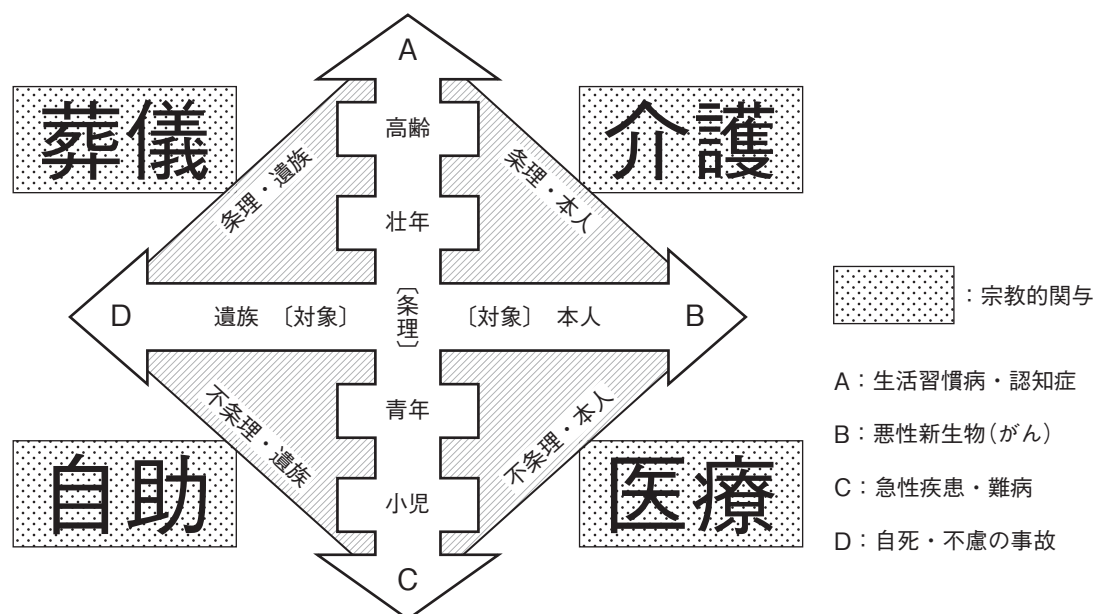


図 エンドオブライフの心理臨床 大西(2015)より改変

縦軸(A ⇔ C)：老人から子どもまで、死者の年齢で広がる軸(条理⇔不条理)

生活習慣病や認知症など、加齢に基づく心身の機能低下と慢性に経過する疾患が重なり緩慢にすすむ死(A：生活習慣病・認知症)を一方の極とし、対して子どもが急性・難治性の疾患や突然死などで比較的短い経過のすえ一時には突然一迎える死(C：急性疾患・難病)を他方に置く。

横軸(B ⇔ D)：本人と遺族という、ケアの対象で広がる軸(本人⇔遺族)

避けられない死を覚え、予期悲嘆を通じて本人がエンドオブライフを育む余地を開く青壮年期のがん緩和(B：悪性新生物)を一方の極とし、対して自死や不慮の事故を筆頭に、関係者が突然遺族の立場に追いやられ、場合によってはスティグマさえ受ける不条理(D：自死・事故)を他方に置く。

加えて、この理念型における宗教家の横断的関与を指摘したが、4つのなかで宗教的ケアの態様はさまざまである。本稿では、わが国の仏教を主体とした宗教的ケアが医療、葬儀、自助、介護の各領域でいかに展開されているかを、カウンセリングを中心とする心理療法との異同を踏まえつつ明らかにする。

むろん心理療法家の機能もまた、宗教家によるケアと同様に、本来領域横断的に働く性向を持つ。ただ、それは折々に修飾される。例えばケアに専門職が介在する場合、そのコストを誰が負担するかという問題を考えてみる。独立開業を選択しない限り、心理療法家であり続けるためには医療、福祉、教育など多職種協働の場に身を置くのが一般的で、エンドオブライフなら医療がもっぱらであろう。また、その医療であれば(自由診療でない限り)社会保障システムの一環に位置づけられる規制も免れない。

よって心理療法家の領域横断的な機能は、コスト、システム、職種間の相互作用などからすぐさま領域をまたぐ実践には結びつかない—結びつかなくていい、のではない—。これに対し、宗教家は経済活動面からも、協働面からも相対的にしぼりが少ないようにみえる。宗教が担当する死の問題の解決の仕方が他と特徴的に異なる点は、それが分業的ではないこと(岸本1964)なのである。だからこそ、宗教的ケアの機能は周囲から検証しにくいとも取れ、超高齢・多死社会を迎えてエンドオブライフにそれがどこで・いかに具現しているか示しておく必要がある。

なお、本稿において宗教とは、わが国で寺院により展開される日本仏教を概ね指し、加えて神道やキ

リスト教の活動を一部補足している。これらと、近代に形成された新しい宗教(創価学会、立正佼成会、真如苑、天理教など)の論考とは分けて扱う必要(井上 2014)があることを予め言及しておく。

2. 心理療法と宗教的ケアの元来的近接性

カウンセリングを中心とした心理療法も、仏教を中心とした宗教も人々の悩める心、あるいは病める心に解決方法(友久 2008)を求める手立てという点で共通する。心理療法のなかには深層心理学的な心理療法のように、自らの営為が宗教と近接していることに自覚的であったり、内観療法のように伝統仏教における行法そのものをアレンジして生まれたりしたものさえある(安藤 2009)。

心理療法家の側面からも、木田(2004)はユングとロジャースを取り上げて、それぞれの理論と実践はかつて宗教が担ってきた働きの意図を継承しつつ、現代に再活性化させる試みとみなせると指摘する。友久(2008)は「カウンセリングにおける繰り返す気づきにより…自己の悩みの根源は生来性に持っている死にあるという気づきが生じた時、カウンセリングから宗教への転換が起こる」とし、両者の連続性を示唆している。

宗教家の側からも、終末期を迎えてはじめてクライアントと関わるのではなく、日頃から相互の信頼関係を築いておくべきで、そういった活動が現在の仏教には不足しており、そのためにカウンセラーとしての研鑽も必要(菊井ら 2005)との指摘がなされている。このように、技法という面からも、それを扱う人という面からも心理療法と宗教的ケアには分野をまたぐ近接性が認められ、図で示す医療、介護、葬儀、自助の各象限を超えて一定の機能を担っている。

3. 宗教教義の受動的後退による価値への懸念(医療)

まず、図における右下の医療^{注1)}、すなわち相対的に若年のクライアント(本人)へケアを提供する場で宗教的ケアが果たす役割を、心理療法と対比させて検証する。エンドオブライフ期のクライアントの苦悩のなかには、スピリチュアルな次元のものが多々含まれる。「なぜ、今この自分が死ななければならないのか」「死ねば自分はどうなるのか」といった疑問である。宗教的ケアの場合は、個々の教義に照らして神仏による救い、死後の審判や浄土といった世界観を援助者により提示することが可能である。

しかし、日本のように国民の多くが自らを「無宗教」と捉えている社会においては、宗教から距離を取った形でスピリチュアリティが語られることが多い(安藤 2009)。宗教家もそれを心得ており、医療の場で教義に沿った話をするというより、遺族の話を傾聴し共感することが大切であって、直接に仏の教えを説くのではなく現代社会に受け入れられやすい日常の言葉で接しようとしている(菊井ら 2005)。

心理療法にも取り入れられるスピリチュアルケアと、宗教的ケアとの違いは、特定の教義や制度化された儀礼から距離を置く点にある(谷山 2005)。しかし、そうであれば言語的にも非言語的にも宗教性を取り払われた宗教家によるケアが、心理療法の体系と異なることを外見からうかがうのは容易でない。

谷山(2005)は、スピリチュアルケアと宗教的ケアのさらなる内的な違いを、前者は援助者が対象者の世界観に入り、後者は対象者が援助者の世界に入ると区分している。ただし、スピリチュアルケアの場合は「無宗教」の対象者の世界観が援助者(の宗教的世界観)と異なるため、援助者がスピリチュアルペインに対する教義上の答えを提示しても、対象者がそれを受け取るとは限らない(小西 2012)。そのような状況下では、受け手にとって外見のみならず内的な差異もまた認め難いだろう。浅原(2005)も、心理臨床家が宗教とスピリチュアリティの存在を認め、それぞれに関わっていかうとすると両者の境界・相違が不分明なことを指摘している。

また、わが国においては政教分離の原則からも、とくに公的機関においては宗教色を打ち出した援助を展開しにくい。ここへ布教という要素も重なってくる。宗教的ケアの場合はクライアントの支援とともに、母体組織の拡大が企図される場合がある。これには宗教家の側からも「宗教的ケアも伝道布教活動も…お寺とか教会の外に行ったとき…公共空間に入った段階ではちゃんと区別していかないと現場の

人間が困る。病院なら病院の院長が困る」「宗教家は、同じ宗派の人が集るとすぐ布教したがらる…それは習性で仕方がないけど、その習性を止める装置を用意しておかないといけない」(鈴木ら 2015)との指摘があり、そのような事情を知る者は「宗教と関係なしにしよう」(島蘭ら 2013)とさえするという。

従って、私立の仏教系ビハラーやキリスト教系ホスピスといった限られた環境を除いては、医療の場で宗教家は、ケアの本質ともいえる自らの教義をクライアントが自由意志からそれを求めるといった限られた場面を除いて一示すことが難しい。特定宗教のフレームワークの“押しつけ”(小西 2012)と捉えられる可能性があるからである。結果として、宗教家がスピリチュアルケアを推し進めようとする「心理学に還元されてしまう…ある意味、最終的には臨床心理士等に領域が食われてしまう。要するに宗教家に勝ち目はない。スピリチュアルケアの方向性と宗教的ケアの方向性はやはり最終的には分けざるを得ない」(鈴木ら 2015)との葛藤が表明され、現況においてこの懸念は解消のめどがない。

むしろ、「天国、浄土、極楽(など)に行く」「神仏や宇宙、自然と一体化する」「生まれ変わる」「草葉の陰で見守る」「記憶にとどまる」などはスピリチュアルな表現であって、スピリチュアルケアの局面で重要な役割を果たす。これらを現代人の宗教意識(傍点筆者)と捉えて布教伝道の際に意識すべき(長尾 2015)とする意見もあるが、やはり医療の場で宗教的ケアの一環へ位置づけることには無理がある。なぜなら、それらは原始仏教になかった大乘仏教の所産だが、同時に日本人に広くみられる死生観としての「祖先崇拝」といずれも関連(谷山 2009)するという特徴を有するからである。

そのような仏教の形は一教理仏教と区別して一生活仏教と称される。ここから「日本伝統の大乘仏教は大らかでいいが、雲をつかむような話になってしまい、具体的なものに降りない形骸化した仏教」(藤田 2014)だと評する立場も生まれてくる。そもそも、日本人は宗教に関心がないというより、日本人の無意識に染み込んでいる「日本教」(ベッカー 2012)をまず持っているといい、前記の宗教意識はその範疇で捉えられるべきであって、ケアの対象者が援助者の世界に入ったわけではないのである。

以上のように、医療の場では宗教教義をケアに必ずしも生かすことができず、心理療法との対比において宗教家は限られた場面を除き、独自の価値を打ち出すことに困難を感じているといえよう。その意味で「僧侶の活躍は病院より、地域のケアチームのメンバーとしての参加が相応しい」(菊井ら 2005)との指摘は、医療における宗教家の立場へ一定の示唆を与えている。

4. 宗教教義の能動的後退による価値の再構築(葬儀)

次に、図の左上の葬儀、すなわち齢を重ねた者が亡くなる(亡くなった)経過のなかで家族(遺族)へケアを提供する場において、宗教的ケアが果たす役割を検証する。葬儀の領域で心理療法は、協働者として今後の可能性が示されている(大西 2015)ものの、具体的な活動の実績はなお乏しい。ただし、こと仏教においても、釈尊の求めは正しくこの世を生きることであって、原始仏教において死後の問題は二義的に留め置かれている(藤井 2013)。すなわち草創期の仏教教団は戒律を保ち、この世の苦しみからの解放・無明煩惱を克服のため修行に邁進する出家者たちの共同体で、死者の葬式は考えなかった(坂井 2014)。その仏教が日本に入り、教えを伝える手段として独自に葬儀を受け入れてきた(金嶽 2013)のである。この経緯^{注2)}を踏まえたうえで、宗教家がわが国において葬儀に果たす役割を論じる。

葬儀は医療と異なって、その展開はまさに非日常的かつ制度化された儀礼を中心とした、宗教性の発露そのものといえよう。葬儀社も、寺院といえは菩提寺という発想があったことから、宗教家の役割には踏み込まずに棲み分けを図ってきた。いわば、葬儀は宗教的ケアの場として磐石のようにみえる。

しかし、現代においては必ずしもそうとはいえない。これを説明するため、葬式仏教という必ずしも宗教家に好意的ではない言葉を参照する。すなわち、江戸幕府の対キリシタン政策の一環として寺院による民衆の統制が徹底するなかで定着した、日本人は全ていずれかの寺院の檀家になることで住民登録され、生死に必ずその寺院が関与するという、わが国の仏教に独特のシステムである^{注3)}。

もちろん明治以降は信教の自由が保証され、寺院と檀家の古典的な関係を意味する政策上の寺請制度は消滅した。しかし、僧侶は檀家の葬儀等の儀礼を執行し、檀家は寺院に布施する形式は守られて、そ

の延長線上に葬式仏教が存在し続けている。これが、人々の苦悩や不安をとともに乗り越えていこうという(いわば中世の頃に顕著であった)宗教的熱気を欠くと、市民から揶揄されているのが葬式仏教である。ここにおける教化は檀家という限定的な対象に限られ、執り行う僧侶の側にも「魅力を感じないルーチンワーク」との潜在意識が伴うものの、いったん現場に戻れば葬式・法事に明け暮れるというダブルバインドの苦悩が表されている(坂井 2014)。

そこに寺院の経済活動という要素が加わってくる。以前は先祖を守ってもらうため、檀家で寺院を維持するという考え方が主流であった。しかし近年、寺院を住職による個人商店のように捉え、布施も法務への対価と捉えて単位時間あたりの金額が高すぎる、とみなす風潮(中村 2013)^{注4)}が現れた。

また、核家族化が進行する都市部はもちろん、人口減少とともに地方でも菩提寺を支え切れなくなった檀家が寺院から離脱する現象が起きている。旧来より続いた葬儀、戒名、埋葬、法要というサイクルを、寺院と檀家の間で反復・継続することが困難になってきたのである。さらには、儀式をせず火葬、埋葬のみを行う「直葬」の出現によって、宗教家が人のエンドオブライフに関与するきっかけさえ失われつつある(藤原 2012)。このように、今や葬儀の場は決して宗教家に磐石でない。

ここから一あたかも医療と同じように一教義を重んじるというより、個々の対象者(遺族)の気持ちに寄り添い、日常の言葉で彼(女)らの悲嘆をケアしようとする動きが生じてきた。ただし医療の場合と異なるのは、脱教義という流れが、むしろ宗教そのものの価値の再興に結びつく点である。

例えば、小川(2012)は被葬者の個別性を重視する追悼法要の取り組みを紹介して、次のように述べている。「一人ひとりの亡き人との関係性を『小さな物語』とすれば、無数の『小さな物語』を吸い上げ、公約数的な生者と亡き人との関係性を構築した『大きな物語』が民衆仏教であり、葬式仏教であった。葬式仏教が批判を浴びて久しいが、それは『小さな物語』を尊重せず、『大きな物語』を形式的かつ一方的に提供してきたからではないだろうか。追悼法要が受け入れられている理由の一つは…『大きな物語』のなかで個々の参加者が『小さな物語』を紡げるように工夫している(ことによる)」。

木井(2015)も同様に「仏教は理『論』に勝ちすぎる。形而上学的すぎるのである。『法』(ダルマ)を追求するあまり個人の心情を軽視している…そこに生じた落差を埋めるべく、本場とは異なる日本“仏教”が成立したのではないか。そのわが国の仏教会のあり方は葬式仏教と揶揄されて久しい。だが、(筆者注：むしろ)もっと追善供養、死者のケアに傾注するべきだ」と指摘する。坂井(2014)はさらに端的に「葬式仏教を再興するとは、仏教を再興することであり、もっと本質的には『葬儀』を再興することに他ならない」と表現している。

旧来の流れから考えると、今や宗教は悲哀を抱える人の同伴者の地位を医療(図：右下)や葬儀(図：左上)に明け渡しつつある(浅見 2012)との指摘も一理あるが、他方、葬儀社より安価で、しかも亡くなったその人ならではの葬儀を「お別れ会」の形で催行し、檀家外からも利用者を集める寺院の報告がある(福澤 2015)。これは、宗教教義を葬儀のなかで、現代に沿う形で捉え直す一つの試みといえよう。

以上のように葬儀の場では、心理療法にみられない独自の宗教的ケアの様式が歴史的に成立しているものの、葬式仏教に対する批判のもと、宗教教義が従前のままの姿では維持しづらい状況にある。しかし、これを親しい者を失った遺族の心情に沿った形へ能動的に再構築することで、より時代に即した宗教的ケアが展開されていく可能性がある。

5. 宗教教義の能動的展開による価値の可能性(自助)

さて、図の左下の自助^{注5)}、すなわち相対的に死者が若年で、急病・難病や突然死、あるいは自死などの経緯による離別に直面した家族(遺族)へ向き合う場で、宗教的ケアが果たす役割を検証する。とはいえこの場合、残された者の衝撃はとりわけ大きいため、心理療法、宗教的ケアを問わず専門職による援助には限界がある。他方で、死別からなる共通の体験や悩みを持つ自助活動に当事者が集い、専門職とは異なる枠組みでメンバー同士が支え合う、サポートグループあるいはセルフヘルプグループといった場の重要性が高まる。硬直的な援助-被援助関係の見直しという観点からも、死別者自身の経験的知

識を重視するポストモダン的なパラダイムからも、自助活動に力点が置かれることは理解できる。ただし、そのような集団に初期の段階から参加できる人も、違和感を覚える者もいて、その感性の違いは大切にされねばならない(武藤 2011)し、専門的援助の確立(張ら 2002)もやはり怠ってはならない。

やはり自助グループの意義を認めつつも、死の問題を扱うのは主として宗教家だ(岸本 1964)とする発想は、近現代において一定の同意を得られるだろう。つまり、宗教家が亡き人と遺族の関係性を認めるのと、一般の人が認めるのとでは説得力が違う(小川 2012)のである。

もちろん、癒しや救いは宗教家その人に由来するのでなく、その根拠となる「教え(教義)」に期待されている、という考え(神野 2005)もある。そうであれば、医療の場では教義に基づいた宗教的ケアに多くを望めない以上、自助領域における宗教家への役割期待はいっそう大きいに違いない。

自死を例にあげれば、遺族が医療に対して強い不信を抱く(川野 2009)場合もあり、そのような時の宗教家の役割はさらに重要である。言うまでもなく、自死は若年者にとどまらず世代を超えた問題だが、故人が若いほど遺族の精神的な落ち込みやショックが強いと報告(Reed & Greenwald 1991)されており、若年の死という不条理の領域でとりわけ注視される意味がある。

具体的には自死遺族へのケアにおいて、日本人に特徴的な悲嘆の回復過程として自然の風景や現象に故人と関連する意味づけを行い、そこから発する物語に勇気づけられる形があるという(飯塚 2007)。自死の受容のためには、遺族なりの死に対する意味づけや解釈を大事にする必要がある(張ら 2002)のである。その意味づけの内容は本稿で既述した「日本教」に属し、それ自体が必ずしも宗教的概念ではないと思われるものの、遺族が自ら探し納得した物語を死後の継続的な関わりの中で引き出すことのできる立場は、自助グループを除けば宗教家の他に考えにくい。

「自殺対策に取り組む僧侶の会」による自死遺族の支援活動(武田 2009)もまた、その一つの現れといえよう。死に宗教的な意味づけ(象徴化)を施す(宇都宮 2004)ことの、遺族へ向けた意義はかねて指摘されている。さらに、ホスピスやビハラーといった宗教的関与が保障された環境では、遺族会や慰霊祭・記念会などが定期的に行われ、追悼法要や礼拝などの宗教儀式(村瀬ら 2012)によって遺族がケアされる場面がしばしば認められるという。

もちろん、不条理の死に対する心のケアだけでは不十分で、生活に即したより実務的な支援も必要なのは当然である。宗教家に限らず、この領域における専門職からの支援はまだ十分に定式化されていないし、その定式化自体が遺族一人ひとりの特別な悲嘆を一般化してしまうと批判される(岡ら 2010)なか、個々の事例に沿った宗教家による教義の能動的な発動は、支援の有力な一翼を担うだろう。

6. 宗教教義の能動的後退による価値の可能性(介護)

最後に、図の右上の介護^{注6)}、すなわち老年期にあって、遠からぬ死を覚える高齢者その人へのケアであるが、これは援助者や技法によらず等閑視されてきた(小澤 1997)。その一方で、高齢者は死を自らの生の延長線上に捉えている。具体的には葬儀を、自らの生の最終表現と位置づけているのである(村上 2001)。にもかかわらず、死者の供養は遺族や友人にとっての意義ばかりが問われる。

本来は、死者とのつながりを確認・補強するという趣旨において、(生者ではなく)死者のスピリチュアルペイン(棚次 2012)こそ勘案すべきだという主張はもっともである。それを不可能とするなら、この主張は死を近い将来に意識した高齢者へ向けたケアに傾注すべき、と読み替えることができるだろう。

往々に高齢者は「皆のいいようにしてくれたら」と、配偶者や子、弟妹へ自らの処遇を一任する。しかし、これは自分の思いより他者への配慮を優先する心情、とみなす構えが必要であろう。その言葉へもたれかかることは、平均寿命を超えた人が「いつお迎えが来てもいい」「余生はおまけ」と述べるのを真に受けることと等しいのではないか(大西 2011)。

それらの言葉を本意とみなす家族には、ケアに対する等閑視と同じ背景がある。すなわち、成年までの死が選別的な、人生の活動・成熟期に訪れる不条理の死なのに対し、高齢における死は全ての人が遭遇し、その終末は人生の最晩年と一致し、相対的に(少なくとも遺族には)受け入れられる死だという世

代間の暗黙の了解である。実際に、死の告知、受容へのサポート、残された者へのケアは成年までの死の中心課題であるが、高齢者には必ずしもそうでない(川合 1998)ことがケアの実情でさえあった。

しかし、介護の魅力は多様な利用者を各々の生活世界の達人と捉え、個別具体的な関わりを通して相互変容を体験できるダイナミクスにある(吉村と青木 2013)ことが次第に認識され、固定的な観念で高齢者のエンドオブライフを画一視する態度は徐々に下火となった。高齢者の側も、終活がほぼ常用語となって葬儀などの事前相談を口にする機会が珍しくなくなった昨今、自らの死に対する意識を「考えたくない、後回しにしたい」から、「今は元気、だからこそ考えておきたい」へ改めつつある(佐伯 2008)。

そして葬儀自体も、高齢者からの眼差しに応じる形で、定まった様式を重んじる典札から故人の個性を反映した集いへ力点を移すようになった。すなわち、死後の高齢者の存在は、「成仏した」対「うかばれぬ」の両極に収斂する死者だけの抽象的な観念世界のなかというより、遺体がいかに処置され、誰が引き取り、いつ葬儀を行い、埋葬や遺骨の管理はといった生の延長線上の個別・具体的な現世のなかにある(大西 2011)。

現代人にとっての死は、地域の共同体や所属する団体の催事ではなくなりつつある。むしろ、より小規模な本人と近親者の間の出来事で、かつ専門職が知識や技術をサービスとして提供する場となってきた。それでも宗教家は、高齢者の求める具体的な話題や疑問に応えることができる。

なぜなら宗教は、死者も生者も過去世も来世も包含する意味世界を提示する(竹内 2008)ことが可能だからであり、その意味でも「死後」や「檀家サービス」に類する宗教行事しか僧侶が行っていない(元山 2015)という状況は惜しい。葬儀における遺族への関わりにとどまらず、死を見据える一人ひとりに向き合った情報提供や問題解決を通して、宗教家がエンドオブライフにおける高齢者を今まで以上に支える、キーパーソンとしての役割を果たす将来性は多分にある。

7. 医療、葬儀、自助、介護の4象限モデルを超えた宗教家の社会貢献

本稿では宗教家の役割として、他の職種では具現できない宗教的行為そのものに焦点をあてている。このことはあたり前のようだが、実は必ずしもそうでない。宗教的行為に大きな役割があることは認めつつも、それ以外の(少なくとも部外者からは)必ずしも宗教的とはうつらない所作(とくに社会貢献)に広く宗教家の役割をみいだす発想もあることを確認しておく。

さて、社会に対して積極的に活動する仏教を称して Engaged Buddhism と呼ぶ。仏教の思想を大胆かつ現代的に読み替え、仏教の理念に基づいて社会を変えていこうとする動きである(元山 2015)。本稿は—その良し悪しは別として—現代日本のエンドオブライフにある当事者が置かれた状況を「所与」とし、本人・家族(遺族)や専門職の機能を論じてきた。

しかし、Engaged Buddhism は個々の援助行為のなかに教義の要素があるか否かというより、むしろ社会の状況の“変革”を通して宗教(宗教家)と人々との繋がりを明らかにし、その宗派や教団そのものの認識や価値を再構築のうえ新たな社会との関係性を築こうとする試みである。

例えば東日本大震災の折には、物心さまざまな支援を各宗教団体が表明し実行している。もちろん災害支援だけに限らず、死を間近にした高齢者、路上生活者、自殺を考えている人々、失業・困窮者、障害者など、孤立し排除されがちな人々との接点で活動する僧侶の存在が伝えられている(島藺 2012)。

これに対し、時代を超えた伝統・普遍的な概念である教義から、折々の社会の状況へ関わることは是非—「貢献」とは受ける側から発せられる好意的な語だが、提供する側の論理は一樣でない—を即座に読み解くことは容易でなかろう。伝統的な宗教活動を通してこそ、社会に資することができると考える寺院・僧侶もある(神達 2015)。その意味で社会貢献は、個人ないし小グループの宗教家の(改革的)意識の発露に根ざしている側面がある。「社会的な活動を盛んにすることは、もちろん重要なことである。しかし、教学的な議論を踏まえずに現象面だけを追うことは、ともすれば表面に流れる危険を伴う」(末木 2012)との指摘も生まれてこよう。

加えて、このような社会活動がいかにせん脱宗教化するシステムは、医療と大差ないのである。社会

貢献においてはルールを共有した超宗教の組織づくり、宗教、宗派を超えて実践する宗教的ケアが意識される(谷山 2012)。他方、「宗教家としての社会貢献」が一人の人間としての社会貢献と異なってくる時、そこでは社会貢献をそれぞれの宗教の理念や活動目的と照合する作業が行われる(井上 2014)。超宗教の、しかし「日本教」には属さない宗教的ケアがあるとすれば、それが宗教的ケアかどうかを(提供側からだけでなく)受け手から評価する観点が必要であろう^{注7)}。

仏教における社会貢献の興隆への評価は、葬式仏教としての現状批判を一つの動機にするにせよ、宗教家の役割として歴史に位置づけられてきた葬送儀礼への関与を受け止め、それ自体の変革を図ることで改革を果たすのか、あるいはそのような葬送儀礼に宗教家の役割を硬直させた社会そのものを変革していくのか、という論点に帰結しよう。大きな意味で宗教改革活動といえ、「社会活動のあり方を新たな教義として位置づける」ことへの宗派や教団全体の意識と、当該宗教の存在意義を担保する社会との間に残された時間の相克と理解することが可能であろう。

8. 結 語

わが国は近代化の過程において、地域や家族という集団のなかで営まれてきた人間関係を切り分け、一部を専門職による支援やサービスへ置き換えてきた。そして超高齢・多死社会を迎えるに至り、医療、葬儀、自助、介護といった領域で当事者同士や専門職がさまざまな活動を呈するに至っている。つまり、従来比較的私的な領域にあった死というテーマは、いまや社会全体の問題となったのである。

従って人々が安心して自らの生を全うし、周囲の者が納得してそれを見送るためには、さらに、予期せぬ不条理に満ちた若年の死に対峙していくためには、今まで以上に当事者と専門職、また専門職相互の円滑な意思疎通と協働が必要だろう。従って、当事者の持つ力を認識し生かす(大西 2005)工夫とともに、専門職は生命の終焉という区切りを境とした暗黙の分業体制を超える努力を払うべきである。

宗教家の働きは領域横断的な普遍性が認められる一方で、職種内の完結性が高いことから、その役割や将来に開かれた可能性の共有がこれから求められよう。宗教家との間の効果的な連携は多くの人々の人生を豊かにするであろうし、その実現へ向けて筆者も微力ながら尽くしていきたい。

研究の遂行にあたって、JSPS 科研費(課題番号: 24590645, 研究代表者: 大西次郎)からの助成を受けた。記して深謝する。

注

注 1) 医療(保健医療)は主に病院で展開される多職種のチームアプローチであり、ここでは医学・看護学にとどまらず、多様な学問的基盤を有する構成員がそれぞれの専門性を発揮しつつ、協働する場と理解されたい。

注 2) キリスト教もわが国において葬儀を積極的に教義教化の場と捉えており、その意識は以下のように示されている。「教会は葬儀を礼拝の時として理解する…葬儀を教会ですることによって人々を教会へ足を一歩でも向けさせることになるからである」「葬儀は教会にとって礼拝の時と同じように理解したい…礼拝であるからこそ伝道の間でもある」(保科 2014)。

注 3) これは寺請制度と称され、檀家化の強制は江戸時代の幕府による寺院への特権的保護につながった。一方で、このような国家的支援の背景には、寺子屋による教育の普及や、弱者・貧困者保護といった教育・社会福祉的貢献への対価的な側面が認められるとの指摘もある(藤原 2012)。

注 4) この根底には、宗教法人が課税に対してさまざまな優遇措置を受けているにもかかわらず、公益性がはっきりしない、いわんや不正の温床になりかねないという考えがある。ただし、わが国で宗教団体や宗教家が公的機関と協働する場合には政教分離原則に抵触することを避けるために、宗教法人ではなく NPO 法人や社会福祉法人といった法人格で社会的な課題に対峙することが多い(白波瀬 2012)という事情があり、そもそも、企業の社会的責任の意味において好んで用いられる公益性という視点で宗教を論じる(神達 2015)ことへの疑

義が表されている。それでも宗教団体への高額な献金の問題などが、消費者被害という形で捉えられるようになった現況においては、宗教団体にも企業と同じコンプライアンスが求められる(塚田 2014)との指摘は無視できない。

注 5) 自助(自助グループ)はサポートグループあるいはセルフヘルプグループといった、死別という共通の経験やそれによる悩みを持つ当事者が集い、メンバー同士が支え合う場と理解されたい。

注 6) 介護(介護福祉)はケアワーカーおよびソーシャルワーカーを想定した、広く社会福祉学を学問的基盤とする専門職の活動の場と理解されたい。

注 7) なお、脱宗教化という観点からの超宗教でなく、真宗大谷派僧侶がキリスト教由来の布教実践を取り入れるといった、宗教そのものをまたぐ超宗教の試みもあることに留意されたい(碧海 2011)。加えて、短期的に目につく形で「役に立つ」ことへの本質的な疑義(藤田 2014)も提出されている。

引用文献

- 安藤泰至：心理療法とスピリチュアリティ ―宗教と心理学をめぐる宗教学的考察―。宗教と社会，**15**，182-184 (2009)
- 浅原知恵：心理臨床家の仕事と宗教家の仕事 ―その関係と境界―。心理臨床学研究，**23** (5)，557-567 (2005)
- 浅見 洋：グリーフケアにおける死者との関係について。北陸宗教文化，**25**，91-108 (2012)
- カール・ベッカー：死と向き合った時にあらわになる日本人の基盤的宗教観。緩和ケア，**22** (3)，207-211 (2012)
- 張 賢徳，津川律子，李 一奉，広瀬徹也：自殺既遂者遺族の悲嘆について ―心理学的剖検協力者の追跡調査―。自殺予防と危機介入，**23** (1)，26-34 (2002)
- 藤井正雄：変わる葬儀 ―お葬式とお墓―。地域開発，**587**，2-5 (2013)
- 藤田一照：仏教は凡夫の問題を解決するメソッドなのか？ 中央公論，**129** (1)，48-53 (2014)
- 藤原 究：葬儀・埋葬における現状と法的課題。杏林社会科学研究，**28** (1)，59-72 (2012)
- 福澤昭司：「儀礼」から「お別れ会」へ ―松本市近辺の葬儀の変化―。国立歴史民俗博物館研究報告，**191**，235-254 (2015)
- 保科 隆：死と葬儀をめぐる牧会。人文学と神学，**6**，37-40 (2014)
- 飯塚 稔：自殺既遂遺族における悲嘆研究 ―何が遺族を支えたのか―。臨床心理学研究，**5**，47-65 (2007)
- 井上順孝：その活動は社会貢献か布教か ―思い惑う宗教団体―。中央公論，**129** (1)，26-31 (2014)
- 神野英明：こころの時代における心理臨床と宗教の問題。福祉と人間科学，**6**，23-33 (2005)
- 神達知純：これからの教化のありかた。大正大學研究紀要，**100**，31-37 (2015)
- 金嶽宗信：死者と遺族のための葬儀の意味。大法輪，**80** (1)，132-135 (2013)
- 川合一良：「福祉のターミナルケア論争」について ―あわせて老人のターミナルケアの専門性の考察―。京都南病院医学雑誌，**17**，1-19 (1998)
- 川野健治：自殺と遺された家族のケア。臨床心理学，**9** (2)，281-286 (2009)
- 木田献一：臨床心理学と宗教 ―個人史的・学際的回顧と展望―。山梨英和大学紀要，**3**，1-14 (2004)
- 木井昭一：仏は死んだ ―私の葬儀観―。大法輪，**82** (1)，190-193 (2015)
- 菊井和子，山口三重子，渡邊美千代，白岩陽子：仏教僧侶によるスピリチュアルケアの現状と展望 ―真言宗僧侶の終末期ケアへの関与に関する調査から―。生命倫理，**15** (1)，120-126 (2005)
- 岸本英夫：人間と宗教 ―問題の所在をたずねて―。死を見つめる心 ―ガンとたたかった十年間―。講談社，東京，180-220 (1964)
- 小西達也：臨床現場での宗教的ケアの可能性とスピリチュアルケア。緩和ケア，**22** (3)，217-220 (2012)
- 元山公寿：現代日本仏教の社会的役割 ―“Engaged Buddhism”をめぐる―。大正大學研究紀要，**100**，5-11 (2015)
- 村上興匡：近代葬祭業の成立と葬儀慣習の変遷。国立歴史民俗博物館研究報告，**91**，137-150 (2001)
- 村瀬正光，東口高志：医療現場における宗教者(チャプレン)の活動。緩和ケア，**22** (3)，225-228 (2012)
- 武藤晃子：自死遺族の電話相談 ―一般社団法人日本臨床心理士会における取り組みから―。臨床心理学，**11** (1)，

122-127 (2011)

長尾正徳：現代布教伝道の研究 —『法話資料ファイル』の創作と展開—。龍谷大学大学院実践真宗学研究科紀要, **3**, 137-142 (2015)

中村龍央：葬儀に関するアンケート結果の一考察。現代宗教研究, **47**, 111-124 (2013)

小川有閑：自死者と遺族の対話 —宗教的グリーフケアへの一視座—。死生学年報, **8**, 29-46 (2012)

岡 知史, 田中幸子, 明 英彦：「グリーフケアは要らない」という声が自死遺族にはある。月刊地域保健, **41** (3), 21-25 (2010)

碧海寿広：近代真宗とキリスト教 —近角常観の布教戦略—。宗教と社会, **17**, 17-30 (2011)

大西次郎：死に直面する心理とスピリチュアルケア —死を語ることへの批判的論考—。精神神経学雑誌, **107** (11), 1169-1177 (2005)

大西次郎：終末期に患者と葬儀を語る。精神科治療学, **26** (3), 386-387 (2011)

大西次郎：葬儀という心理臨床 —グリーフケアによる連携—。地域ケアリング, **17** (11), 66-69 (2015)

小澤利男：高齢者の終末期医療におけるエイジズム。Geriatric Medicine, **35** (11), 1525-1529 (1997)

Reed, M. D. & Greenwald, J. Y.: Survivor-victim status, attachment, and sudden death bereavement. Suicide & life-threatening behavior, **21** (4), 385-401 (1991)

佐伯美智子：葬儀のこと話ませんか。月刊消費者, **681**, 3-23 (2008)

坂井祐円：「葬儀」が生み出す協同性のゆくえ。ホリスティック教育研究, **17**, 55-69 (2014)

島 蘭 進：仏教者による社会活動の可能性。社会貢献する仏教者たち —ツナガリ社会の回復に向けて—。臨床仏教叢書 2, 臨床仏教研究所・編, 白馬社, 京都, 183-192 (2012)

島 蘭 進, 高木慶子, 伊藤高章：グリーフケアと宗教。グリーフケア, **2**, 67-98 (2013)

白波瀬達也：沖縄におけるキリスト教系 NPO によるホームレス支援 —Faith-Related Organization の 4 象限モデルを用いた考察—。宗教と社会貢献, **2** (2), 41-58 (2012)

末本文美士：いま仏教は何をなすべきか。現代仏教論, 新潮新書, 新潮社, 東京, 182-185 (2012)

鈴木岩弓, 谷山洋三, 鍋島直樹, トマス・ヘイスティングス, 島 蘭 進, 高木慶子, 伊藤高章, 高山貞美：臨床宗教教育と人材育成の展望。グリーフケア, **3**, 89-114 (2015)

武田慶之：僧侶として自死に向きあう —社会的問題としての取り組み—。現代のエスプリ, **501**, 116-124 (2009)

竹内弘道：宗教の役割と生命倫理 —死者なき倫理の奢り—。生命倫理, **18** (1), 166-169 (2008)

棚次正和：生者と死者のスピリチュアルケア。死生学年報, **8**, 5-28 (2012)

谷山洋三：スピリチュアルケアの仏教的理解への一考察 —〈如来蔵への信解〉をめぐって—。印度學佛教學研究, **54** (1), 548-552 (2005)

谷山洋三：仏教の死生観とスピリチュアルケア。臨床精神医学, **38** (7), 929-936 (2009)

谷山洋三：災害時のチャプレンの働き —その可能性と課題—。宗教研究, **86** (2), 347-367 (2012)

友久久雄：宗教と心理療法 —三願転入とカウンセリング・プロセス—。龍谷大學論集, **472**, 2-18 (2008)

塚田穂高：偽装・虚勢・無反省 —「新新宗教」に蔓延する諸問題—。中央公論, **129** (1), 40-47 (2014)

宇都宮輝夫：死とその宗教的意味づけ。宗教研究, **77** (4), 937-938 (2004)

吉村夕里, 青木信雄：認知症高齢者の表出とケア提供者の受けとめ —介護職を中心としたアンケートとインタビュー調査から—。心理社会的支援研究, **3**, 43-62 (2013)

受稿日 2015 年 9 月 19 日 受理日 2015 年 11 月 26 日

子どもの連合運動の発達指標としての Fog test とその臨床的適用

萱 村 俊 哉

(武庫川女子大学短期大学部心理・人間関係学科)

Fog Test as a Developmental Scale of Children's Associated Movements and Its Clinical Application

Toshiya Kayamura

*Department of Psychology and Human Relations,
Mukogawa Women's University Junior College Division, Nishinomiya 663-8558, Japan*

Abstract

The Fog test (FT) originally described by Fog and Fog (1963) is a neurological test to examine the occurrence and inhibition of involuntary associated movements (AMs) on the upper extremities of children accompanying walking with the feet inverted. In this paper, the normal development and clinical significance of AMs triggered by the FT throughout childhood is considered through a review of previous neurological and neuropsychological research using the FT or its modification (MFT). In normal children, there is a highly significant reduction in the amount of AMs with increasing age. In addition, typical sex difference (fewer AMs in girls than in boys) and laterality (fewer AMs on the left side than on the right) also exist. Children with some developmental disorders or behavioral problems tend to show more AMs than normal children, implying the presence of clinical significance of AMs examined using the FT. Nevertheless, even in normal children, subtle movements such as mild supination of the upper extremities are likely to remain after age 12. Therefore, in the interpretation of FT findings, it is necessary to recognize the lowered clinical value of such subtle movements observed in school-aged children.

はじめに

アメリカ精神医学会(American Psychiatric Association)の診断基準(Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, Fifth Edition; DSM-5)の神経発達障害(neurodevelopmental disorders)の中の運動障害(motor disorders)に発達性協調運動障害(Developmental coordination disorder; DCD)がある。DSM-5(高橋・大野・染矢他(訳)¹⁾)ではDCDの「診断を支持する随伴的症狀」として次のように記されている。すなわち「発達性協調運動症をもつ子どもの中には、抑えられない手足での舞踏病様運動または鏡像運動のような付加的な(通常は抑圧されている)動作をみせるものがある。これらの“溢れ出す”動きは、神経学的異常というよりも、神経発達の未成熟や神経学的微細徴候と呼ばれている。最新の文献および臨床実践のどちらにおいても、これらの診断上の役割はいまだ明らかではなく、さらなる評価が必要である(*引用文中の下線は筆者による)」¹⁾。

ここに示されている「溢れ出す」動きつまり overflow movements とは、意図せず出現する(すなわち不随意的な)運動の総称であり、その中の一つに、何らかの意図的な運動を遂行しているとき、その運動に誘発され、本来の運動とは直接関係のない身体部位に出現する連合運動(associated movements; AMs)がある。先行研究の多くはこの AMs と overflow movements を同義に扱っている。しかし、overflow

movements は AMs 以外の不随意運動(たとえば舞踏病様運動)も含んでおり、概念上、AMs は overflow movements の部分と言える。

上に引用した DSM-5 の記述¹⁾は、AMs を含む overflow movements は神経発達の未熟さのサインや神経学的微細徴候(soft neurological signs; SNS)であり、DCD の診断を支持する所見ではあるが、それ以上の診断的な意義は判然としないとの意味である。それでは、子どもにみられる AMs や overflow movements の意義について現状ではどの程度解明されているのだろうか。AMs や overflow movements の DCD における診断的役割を今後明らかにして行くためには、これまでの先行研究における知見を整理する必要があるだろう。これが本稿執筆の動機である。

上述のように、AMs は overflow movements の部分的概念であるが、AMs 自体もその誘発方法や出現部位によりサブカテゴリに分類できる。たとえば、一側上(下)肢の運動に誘発され同側の異なった部位に出現する同側性(ipsilateral) AMs、そして対側の上(下)肢に誘発される対側性(contralateral) AMs がある。さらに、尾部から頭部(直立姿勢の人間の身体では「下から上へ」となる。以下、この表現を用いる)への方向に誘発される AMs もある。年少児では、手や足の運動時に口部が律動的に動いたり、頭を下げる運動がみられることがある。また、両足の底の外側だけを接地して歩行(Fog test、以下、FT)させたときにみられる上肢の AMs は、下肢の運動により上肢に誘発されたものである。これらは下から上へと誘発された AMs の典型である。

誘発方法や出現部位の異なる AMs は、その出現の神経機序も異なる可能性が指摘されている(Wolff, Gunnoe, & Cohen, 1983)²⁾。たとえば、対側性 AMs は脳-脊髄路の中の対側性錐体路(contralateral pyramidal tract)を経由して出現し、一方、下から上へと誘発される AMs は同側性錐体路(ipsilateral pyramidal tract)を経由して出現すると推測されている(Wolff, et al., 1983)²⁾。このような機序の違いは AMs の出現、さらにそれらの臨床的意義の違いにまで影響すると考えられる。したがって、AMs の出現における発達の変化や臨床的意義を論じる場合、種類の異なる AMs を一まとめにするのではなく、その誘発方法、出現部位、そして想定される神経機序の違いにより個別に論じる必要がある。このため本稿では、まず、FT により下から上へと誘発される AMs に限定し、筆者らによるこれまでの研究を基軸に、小児発達や神経心理学の分野の先行研究を参考にして、その発達特性(発達的变化、左右差、性差、信頼性)と臨床的適用の可能性を考える。

ところで、FT に関連する研究の近年の動向は、小学校に入学する前に実施される検診におけるその意義の検討にある。実際、スウェーデンの Gillberg を中心とした研究グループが、DCD の近縁の障害である DAMP (Deficits in attention, motor control and perception) 検出目的の就学前簡易スクリーニングとして、片足立ち、図形模写、diadochokinesis、FT の 4 検査で構成されたバッテリーの有効性を報告している(Landgren, Kjellman, & Gillberg, 2000)³⁾。我が国の自治体でも就学前の発達障害の検診(所謂、5 歳児検診)を実施するところが増加している。このような動向をふまえ、本稿では就学前の、幼児を対象とした FT の活用や意義にも言及する。

Fog Test (FT)

デンマークの小児科医である Fog 夫妻(Fog & Fog, 1963)⁴⁾が、AMs を正確に調べる目的で考案した負荷歩行(stress gait)検査が FT である。FT は正式には feet to hands test と呼ばれる。すなわち足から手に AMs が誘発されるテストとの意味である。彼らは、神経系の抑制機能の成熟と微細な脳障害を評価するため AMs に着目した。FT の観察点は、内反歩行(walking with feet inverted)により上肢に誘発される synergistic で特異的な肢位(posture)であり、この不随意的な肢位が FT における AMs である。内反歩行とは両足の外側を接地して数メートル歩かせる方法である。また、特異な肢位すなわち AMs は具体的には、両腕の回外(supination; 前腕の前方回旋、つまり手掌が前方を向く所謂 forward sign、以下、(forward sign)や回内(pronation)、肘部屈曲などである。

Fog & Fog (1963)⁴⁾は、2～16 歳の健常児 265 名、及び出生時合併症ないし出生後脳障害の既往のあ

る子どもを含む知的障害児 184 名を対象に FT を実施し、① AMs は年齢とともに減少、消失して行く、② AMs の消失は健常児より知的障害児の方が遅延する、③ 出生時合併症や脳障害の既往のある知的障害児の方が既往のない知的障害児より AMs の消失がさらに遅延することを明らかにした。この結果から彼らは、FT で誘発された AMs は神経系の抑制機能の成熟を表す指標であり、AMs の消失の遅延は微細な脳障害の存在を示す徴候であるとの結論に至った。

FT により誘発された AMs の発達的变化

FT により誘発される AMs は、健常児の場合どのような発達的变化を遂げるのか。上述のように、Fog & Fog (1963)⁴⁾ は 2 ～ 16 歳の年齢域において AMs は次第に消失することを明らかにしたが、同時に彼らは、16 歳でも約 1/3 の子どもに手掌の forward sign など AMs が残存する事実も指摘している。つまり FT により誘発される AMs は発達期に消失傾向にあるが、わずかな forward sign などはなかなか消えないのである。

Fog & Fog (1963)⁴⁾ によるこの所見は、果たして本邦の子どもたちにも当てはまるのだろうか。その確認目的で、萱村(1997)⁵⁾ は、本邦の 3 ～ 12 歳の右利き健常児 478 名(男子 239 名、女子 239 名)に対し FT を試みた。検査では、両腕を弛緩して体側につけた状態で両足の外側だけを接地させ、検者に向け約 3m 歩行させ、U ターンして元の位置に戻らせた。

AMs として肘部屈曲と手掌の forward sign の 2 つの動きに着目し、それらの反応の有無(+ or -)を肉眼的に判定し、その発達的变化を検討した。肘部屈曲、手掌の forward sign 其々の反応を「両腕にみられる」「右腕だけにみられる」「左腕だけにみられる」「両腕にみられない」の 4 カテゴリーからチェックし、各カテゴリーに属する子どもの割合を調べた結果、Fig 1 に示すように、年齢の上昇につれ両反応とも減少した。両腕ともに反応がみられない子どもの割合が 50% に達した年齢は、肘部屈曲は 7 歳、手掌の forward sign は 10 歳であり、肘部屈曲に比べ手掌の forward signの方が残存しやすいことも判明した。また、12 歳でも両反応ともにみられない子どもの割合は 70% 台に留まった。このように、FT により誘発された AMs の発達的变化は、本邦においても Fog & Fog (1963)⁴⁾ の報告を概ね支持する結果になった。

萱村(1997)⁵⁾ はさらに、478 名中 210 名の歩行をビデオに収録して AMs の年齢的变化をビデオのスロー再生を用いて詳細に分析した結果、AMs の消失は肘部から始まり末端の手首へと進む傾向が示唆されたことを特記すべき所見として挙げている。運動発達には一般に、体幹からの距離が近位な部位か

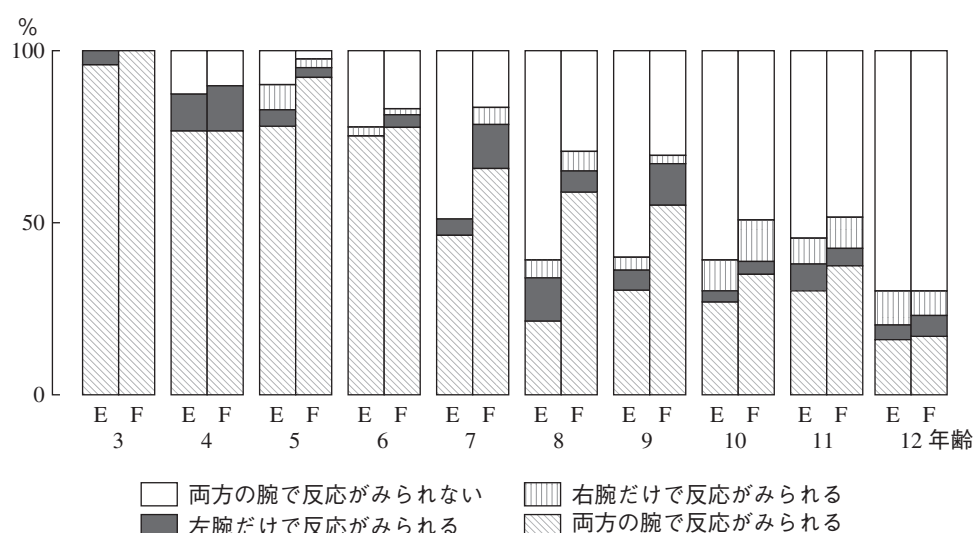


Fig 1 Fog test における肘部屈曲(E)と手掌の forward sign (F)を示した子どもの年齢別割合(萱村, 1997)⁵⁾

ら遠位な部位へと進む方向性がある(Gesell, Amatruda, Castner, & Thompson, 1939)⁶⁾. FTにより上肢に誘発される AMs もこの原則に合致し, 上肢のより体幹に近い肘部の AMs が末端の手の AMs に先立って消失すると推測された(萱村, 1997)⁵⁾.

Modified Fog Test (MFT)

Fog & Fog (1963)⁴⁾の研究は実証的と言うより臨床報告に近く, 彼らの論文の中には AMs の評価法やその信頼性(reliability)に関する具体的記述がみられない. そこで後年, Szatmari & Taylor (1984)⁷⁾は, Fog & Fog (1963)⁴⁾による FT を発展させ, Modified Fog Test (MFT)を開発した. 彼らは MFT の信頼性を評価した上で MFT の臨床的意義を検討した. MFT は, 本来の FT (すなわち内反歩行)と 6 種類の歩行検査から構成され, 計 7 種の検査で出現する AMs (及び歩行姿勢, バランス)を総合評価するものである. 彼らが新たに付加した 6 種類の歩行とは, 継ぎ足歩行(heel-to-toe), 踵歩行(on heels), 爪先歩行(on toes), 外反歩行(with feet everted)の 4 歩行に, 内反歩行と外反歩行の其々 1 回目の検査終了時に, 両腕の動き(すなわち AMs)の出現を子どもたち自身に意識させ, 今度はそれが出ないように抑制する努力をして歩くよう指示した再検査を 2 つ加えたものであった.

Szatmari & Taylor (1984)⁷⁾はスコアリングの方法にも工夫を凝らした. 彼らは, 検査場面での観察により AMs をスコアリングするのではなく, 検査の様子をビデオに収録し, その再生画像から AMs のスコアリングを行ったのである. これにより, 画像を繰り返し確認でき, 複数の評価者の合議によってスコアリングすることも可能となった. スコアリングの精度を高めることが可能となっただけでなく, 評価者間信頼性(inter-rater reliability)や評価者内信頼性(intra-rater reliability)などスコアリングに関する信頼性の確認が容易になった. 各歩行検査のスコアリングの観察点は次の 6 カテゴリーに分けられた. すなわち, ①下肢の肢位の実行の困難さ(0= 困難さはない; 1= 少し困難; 2= 顕著に困難; 実行困難; 8= 実行せず), ②バランス維持の困難さ(0= 困難さはない; 1= 少し困難; 2= 顕著に困難), ③前かがみ, あるいは体幹の屈曲の程度(0= みられない; 1= 少しみられる; 2= 顕著にみられる), ④腕の回外(すなわち, forward sign), あるいは伸展の程度(0= みられないか, ごくわずか; 1= 20°より小さい; 2= 20°より大きい), ⑤手の動きの程度(0= みられないか, ごくわずか; 1= 手首の動きか, あるいは手指の動きの何れかがみられる; 2= 手首の動き, 手指の動きともにみられる), ⑥肘部屈曲の程度(0= みられないか, ごくわずか; 1= 45°より小さい; 2= 45°より大きい)であった. これらの中で, ④, ⑤, ⑥は左右の腕別にスコアリングされた. 一つの歩行検査の合計スコアは 19 になり, 7 種類の合計スコアは 133 になる. この合計スコアが高いほど AMs の出現の多い未熟な歩行を示している.

Fog & Fog (1963)⁴⁾のオリジナルの FT に比べ, Szatmari & Taylor (1984)⁷⁾の MFT は, このような客観性を向上させる工夫が施されているため, 筆者らを含め幾人かの研究者が MFT (あるいはその変法)を採用している. ただし周知のように, 継ぎ足歩行, 爪先歩行, 踵歩行の 4 検査は, 所謂 Prechtl 検査として知られる微細脳機能障害(MBD)検出の検査法(Touwen & Prechtl, 1970)⁸⁾に含まれる古典的な歩行検査であり, Szatmari & Taylor (1984)のオリジナルではない.

MFT の幼児期への適用可能性

ここで, 就学前の検診を念頭に置き, 幼児期の MFT の適用可能性を考える. Kayamura, Sakamoto & Kaneto (1988)⁹⁾は, 右利きの健常幼児 45 名(4 ~ 6 歳)を対象に, 踵歩行, 爪先歩行, 内反歩行, 外反歩行の 4 検査を実施した. 上記した Szatmari & Taylor (1984)⁷⁾の方法を踏襲し, 検査中の様子をビデオに収録し, その再生画像から歩行姿勢, バランスと AMs のスコアリングを行った. 1 つの歩行検査における最高スコアは 19 であり, 4 種類合計の最高スコアは 76 となる. 検査の結果, 1 名を除き残り全員が 4 種類の歩行が実行可能であった. 上肢に現れた AMs は下肢の肢位に類似した検査特異的な肢位になった. すなわち, 踵歩行では指の屈曲と手首の背側屈曲がみられ, 爪先歩行では腕や指の外転や伸

展がみられた。内反歩行では肘部、手首、指の屈曲や手掌の forward sign が誘発された。さらに外反歩行では上腕の内旋、伸展、指の伸展がみられた。また、4種類の歩行検査の中で最も高スコアであったのは外反歩行であり、次に内反歩行、踵歩行と続き、最も低スコアであったのは爪先歩行であった。これは実行するのが困難な検査ほど AMs の出現量が増加することを意味している。つまり随意運動遂行のために払う努力の水準に比例して AMs の出現量が増加するのである (Todor & Lazarus, 1986)¹⁰⁾。Kayamura et al. (1988)⁹⁾による以上の所見は、Szatmari & Taylor (1984)⁷⁾が学童を対象とした MFT の結果と一致しており、これにより、MFT は学童期だけでなく幼児期にも適用できることが示された。

一方、Wolff et al. (1983)²⁾は AMs を発達年齢 (developmental age) の指標と捉え、右利きの幼稚園年長児 (5, 6 歳) と小学校 1 年生 (6, 7 歳) 各 50 名に、爪先歩行、踵歩行、内反歩行、外反歩行の 4 歩行検査を半年の間隔で 1 年に 3 回実施し、検査の場で肉眼的に観察した AMs (スコアの範囲: 0: 反応なし, 1: 下肢の形態とは類似していない非特異的な AMs, 2: 下肢と類似した形態の特異的な AMs) の変化を検討した。その結果、彼らは、幼稚園年長の 1 年間、踵歩行と内反歩行において AMs スコアが低下する子ども数が有意に増加し、小学校 1 年の 1 年間では、内反歩行と外反歩行において AMs スコアが低下する子ども数が有意に増加したと報告した。この所見はつまり、発達のピークが歩行検査の種類により異なること示している。内反歩行 (すなわち Fog & Fog (1963)⁴⁾ の原法) は幼稚園年長から小学校 1 年生にわたる年齢域全てがピークである。また、踵歩行は幼稚園年長、外反歩行は小学校 1 年生が発達のピークと言える。さらにこの点から判断すると、幼稚園年長、小学校 1 年の両時期において顕著な発達の変化はみられなかった爪先歩行の発達のピークはこれらの時期からは外れていることになる。このように、MFT に含まれる各歩行検査の発達のピークは同時期とは限らない。就学前後の時期における MFT では歩行検査によるこのような発達のプロファイルの違いも念頭に置く必要があろう。

Wolff et al. (1983)²⁾はまた、外反歩行に関し次のように注意を促した。それは、6 歳でも外反歩行の実行困難な子どもが少なくなく、AMs の出現量が多い (スコア 2 を示す子どもの数が多い) ため、幼稚園年長から小学校 1 年の年齢では外反歩行は検査には適さないということである。ただ、Wolff et al. (1983)²⁾は上肢の AMs をその場での肉眼的観察から (0 ~ 2) の 3 段階でスコアリングしており、ビデオに収録して歩行姿勢やバランスをも考慮したスコアリングを行ったわけではなかった。したがって、外反歩行では AMs の出現量が多すぎる (すなわち個人差が現れない) という Wolff et al. (1983)²⁾の指摘は、このようなスコアリング尺度の粗さから生じたと推測される。Kayamura et al. (1988)⁹⁾や Szatmari & Taylor (1984)⁷⁾の研究のように、ビデオを用いて詳細なスコアリングを行うと、比較的難度の高い外反歩行は幼児期から学童期にかけての長期的な発達を調べる検査としてむしろ適しているかもしれない。

性差と左右差

幼児期の MFT では、男子より女子の方が熟達した歩行が可能で、AMs の出現も少ないことが明らかにされている (Kayamura et al., 1988)⁹⁾。学童期の MFT における性差に関しても、Taylor, Powell, Cherland, & Vaughan (1988)¹¹⁾が、学童期 (7 ~ 10 歳) の MFT では男子より女子の方が優れていることを指摘している。元来、神経発達は男子よりも女子の方が 1 ~ 2 年早いとされており (Tanner, 1978)¹²⁾、MFT における性差は神経系の成熟速度における性差を反映していると考えられる。FT, MFT では幼児期から学童期にかけてこのような女子優位の性差があることは臨床でも周知されるべきである。

一方、左右差に関しては、萱村・坂本 (1989)¹³⁾が子どもの利き側間で FT の結果を比較検討している。幼児 (4 ~ 5 歳)、小学生 (9 ~ 11 歳) の 2 群に分けて分析した結果、小学生では右利きや両利きに比べ左利きに AMs の出現量が多いこと、さらに利き側の違いに関係なく左腕の方が AMs の出現量が少ないことが明らかにされた。左利き女子を対象とした別の MFT 研究でも、右より左上肢の AMsの方が弱かったことが指摘されており (Taylor et al., 1988)¹¹⁾、FT や MFT では右よりも左上肢の AMs が相対的に弱い傾向があると言える。通常の歩行では左右差がみられない場合でも、FT や MFT のような負荷をかけると、健常児でも左上肢の方の反応が弱い (つまり右の反応の方が強い傾向にある) のである。

信頼性の検討

学童期における MFT のスコアリングの評価者間信頼性と再検査信頼性が高いことは確認されている (Szatmari & Taylor, 1984⁷⁾; Taylor et al., 1988¹¹⁾). しかし、就学前検診では、幼児期の MFT におけるスコアリングの信頼性が問われなくてはならない。この点について、萱村・中嶋・坂本(1999)¹⁴⁾は、4～6歳の同一の幼児の集団を対象に、Szatmari & Taylor (1984)⁷⁾が開発した MFT (7種類の歩行検査を含むもの)を、約5ヶ月の間隔を開けて2回実施し、評定者間信頼性と再検査信頼性を検討している。結果は、MFT スコアにおける評定者間信頼性は年長児の男子では良好、年長児の女子と年中児の男女でも許容範囲と判定された。また、MFT スコアにおける再検査信頼性は年長児では男女ともに許容範囲と判定されたが、年中児では男女ともに不十分であるとの結果を得ている。

このように、幼児期でも MFT スコアに関してある程度の高さの評定者間信頼性は認められた反面、5か月の間隔での再検査信頼性では、5～6歳の年長児では許容範囲であったが、4～5歳の年中児では不十分なものであった。このことは、4～5歳の年齢域では MFT スコアの変動が大きく、この年齢域の子どもたちの場合、1回目の検査結果から5か月後の検査結果の予測をすることが困難であることを示している。

臨床的適用における留意点

FT によって誘発された AMs の消失は知的障害児では遅延し、とくに出生時の合併症や脳障害の既往のある子どもの方が既往のない子どもよりも AMs の消失がさらに遅延する (Fog & Fog, 1963)⁴⁾。また、学童期の MFT スコアの高い子どもほど新生児期の合併症と問題行動が多くみられ、読字能力が遅れ、体育の成績が悪いことも明らかにされている (Szatmari & Taylor, 1984⁷⁾; Taylor et al., 1988¹¹⁾). さらに、就学前のスクリーニングとしての意義も指摘されている。スウェーデンでは就学前に DAMP (Deficits in attention, motor control and perception)を検出するために、片足立ち、図形模写、diadochokinesis、FT の4検査バッテリーが有効と報告されている (Landgren, Kjellman, & Gillberg, 2000)³⁾。DAMP は北欧を中心に使用されている概念で、DCD と ADHD が同時にみられ、自閉症スペクトラム障害(ASD)の連続体上に位置する症候群である (Gillberg, 2002)¹⁵⁾。先行研究において、このように FT や MFT で誘発された AMs の臨床的意義が述べられている。しかし、ここでの臨床的意義は、神経発達の未熟さのサインや SNS としての意義であって、それ以上の診断上の意義を示すものではない。

上に指摘したように、FT や MFT で上肢に誘発される AMs の出現率は学童期を通して決して低くない。とくに、両上肢の前腕の forward sign は肘部屈曲よりも残存傾向が強い。FT では、12歳でも AMs が残存することはよくあり、わずかな forward sign などは臨床的意義があるとは言えない。

Touwen (1979)¹⁶⁾は、歩行中上肢や下肢の動きに左右差がみられる場合、軽度の hemisindrome が疑われると述べている。一側性の問題がある場合、通常歩行では異常が認められなくても、FT や MFT のように負荷をかけた歩行をさせると、通常歩行では認められなかった左右差が現れる可能性がある。したがって、FT や MFT において左右差は重要な所見だが、左右差の意味を考える場合、FT や MFT では元来、健常児でも右上肢に比べ左上肢の AMs の出現頻度が少ないことに注意が必要である。同様に、健常児では幼児期、学童期にかけて女子優位 (AMs の消失時期が早い)の性差があることにも留意する必要がある。

幼児期でも FT や MFT は適用可能ではある。ただ、付け加えると、歩行検査の種類により発達のピークが同時期ではないので、MFT の7検査全てを施行するのではなく、検査対象者年齢において発達のピーク (AMs が顕著に消失する)にある歩行検査を選択するのも一法だろう。内反歩行(すなわち FT)は幼稚園年長から小学校1年生にわたる年齢域が発達のピークである。このため、就学前の検診では MFT よりも簡易な FT を適用するのもよいかもしれない。実際、Landgren et al. (2000)³⁾は就学前の FT が DAMP の検出に有効であることを証明している。Landgren et al. (2000)³⁾は FT における「上肢の外転

(abduction)を伴った 60° 以上の肘部屈曲」を明らかな異常(marked abnormality)と判断し、その反応の有無を判定している。このようにターゲットになる AMs を明確に定義し、その反応が見られたか否かを観察して判定する方法は、必ずしもビデオなどの機材を用いる必要がなく、スクリーニング検査に適している。しかし、同じ子どもを継時的、経年的に検査をしたり、AMs と問題行動などの関係を検討するためには AMs の出現量を測定する必要がある。その場合は、スコアリングの客観性や精度を担保するため、ビデオの再生画像などを用いて AMs だけでなく歩行姿勢やバランスをもスコアリングすることが必要だろう。ただし、たとえビデオによるスコアリングを採用しても、4～5 歳という若い年齢では MFT スコアの変動が大きく、1 回のみ検査で得られた結果の解釈(判断)には慎重さが求められることも指摘しておく。

今後の課題

FT や MFT で誘発された AMs が何故、知的障害や問題行動、読字障害などと関係するのだろうか。AMs の、SNS としての意義以上の診断上の役割を明らかにすることは、その関係性のメカニズムを解明することにほかならない。Waber, Mann, & Merola (1985)¹⁷⁾は、小学校 3 年女子 87 名と 5 年生男子 90 名に MFT (踵歩行、爪先歩行、内反歩行、外反歩行)をはじめとした AMs 検出の検査と、概念学習課題を実施した結果、知能や社会経済的条件の影響を取り去っても、AMs の出現量の少ない子どもに比べ出現量の多い子どもは概念学習課題での成績が有意に低かったことを報告している。彼らはその原因を分析し、AMs の出現量の多い子どもは少ない子どもよりも概念学習課題において不適切な(反応すべきでない)刺激に反応してしまう、つまり不適切な刺激に対する反応を抑制できなかったことを明らかにした。すなわち、AMs は注意機能と関係しているのではないかというわけである。AMs の消失は神経系の抑制機能を反映した現象であり、認知的課題においても、不適切な刺激に対する反応を抑制し、適切な刺激のみに反応する行為にもやはり抑制機能が関与している。Waber et al. (1985)¹⁷⁾は、運動面での抑制機能と認知面での抑制機能は別ものではなく、両者は共通の神経学的機序に基づいているのではないかと推測している。

このように AMs と注意機能との関係に焦点化して研究を進めることは、AMs 研究の今後の基本的方向と考えられる。とくに右前頭前野が司っている、非適応的行動を始発させない機能やワーキングメモリーの発達と AMs との関連を明確にすることが今後の最大の課題だろう。そして最終的には、運動と行動や認知の抑制機能間の神経学的(神経心理学的)なモデルを構築することが求められる。

その場合、大切なことは、AMs を一まとめにしないことである。Wolff et al. (1983)²⁾は思春期まで残存する鏡像運動(mirror movements)は両手同時に実行する協調運動(両側性協調運動)の発達を阻害するのに対し、FT のように下肢の運動により上肢に誘発された AMs が残存しても、両側性協調運動の実行を直接阻害しないと述べ、これら種類の異なる AMs が発達の、機能的に異なった意味を持つことを強調している。この指摘から、AMs と注意機能の関係も、両者の関係の一般的な傾向を探索するのではなく、AMs の誘発方法の種類により細かく分析する必要があると言える。

また、冒頭に記したように、DSM-5 では DCD 診断における overflow movements (AMs を含む)の意義について述べられている¹⁾。しかし、現実には、DCD でみられるような協調運動障害は ADHD や ASDをはじめ他の発達障害でもある程度普遍的に認められる。したがって、今後 AMs の臨床的意義や診断上の役割を考える場合、対象を DCD に限定するのではなく、それ以外の発達障害も視野に入れて AMs の臨床的意義や診断的役割を探索するのが自然な方向だろう。

最後に、用語の問題に言及する。子どもの神経成熟やその異常との関連で AMs が研究されたのは、Fog & Fog (1963)⁴⁾が嚆矢と思われる。彼ら以降、様々な研究者が AMs の臨床的意義やその発現機序に関する研究を行ってきた。しかし、それらの研究では必ずしも associated movements (AMs)ではなく、研究者によって様々な用語が使用された。よく使用された用語は、motor overflow, motor irradiation, synkinesis, mirror movements などである。これらの用語は一般的には AMs と概ね同義に用いられるが、

厳密にはニュアンスが異なる。たとえば、motor overflow や motor irradiation は通常その出現部位を特定せず、ある随意運動によって身体のだこかの部位に運動が溢れ出た現象を指している。また、mirror movements すなわち鏡像運動は、AMs の中でも対側性に出現し、しかも元の随意運動と類似した動きを指しており、対側性模倣連合運動とも言う。たとえば、diadochokinesis で、右腕の回内回外運動を実行しているとき、左腕にみられる回内回外様の運動は鏡像運動である。さらに synkinesis (同時運動) は動きと言うよりも肢位に重点が置かれたことばであり、synergistic な屈曲、伸展現象をさすことが多い。本稿で扱った FT や MFT に誘発された肘部屈曲は synkinesis と表現されることもある。このように同じ現象を異なった用語で表わされることが多々ある。このことが「溢れ出す」動きの診断上の役割がいまだ明らかではない」(DSM-5)¹⁾原因の一つになっている可能性も否定できず、今後、こういった用語の整理を行う必要があろう。

引用文献

- 1) 日本精神神経学会(監訳)、高橋三郎、大野裕、染矢俊幸他(訳)、DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル(2014) (American Psychiatric Association, Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders: DSM-5 (2013))
- 2) Wolff, P. H., Gunnoe, C. E., & Cohen, C., Develop. Med. Child Neurol., **25**, 417-429 (1983)
- 3) Landgren, M., Kjellman, B., & Gillberg, C., Acta Paediatr., **89**, 302-309 (2000)
- 4) Fog, E. & Fog, M., in Minimal Brain Dysfunction, ed. by Box, M. & Keith, R., Heinemann, London, pp.52-57 (1963)
- 5) 萱村俊哉, 発達の神経心理学的評価, 多賀出版, 東京, (1997)
- 6) Gesell, A., Amatruda, C. S., Castner, B. M., & Thompson, H., *Biographies of child development. The mental growth careers of eighty-four infants and children*. Paul B. Hoeber, Inc., New York, (1939)
- 7) Szatmari, P. & Taylor, D. C., Develop. Med. Child Neurol., **26**, 297-310 (1984)
- 8) Touwen, B., & Prechtl, H., *The neurological examination of the child with minor nervous dysfunction. Clin. in Develop. Med. No.38*, Heinemann, London, (1970)
- 9) Kayamura, T., Sakamoto, Y., & Kaneto, T., Ann. Rep. Sci. Liv., Osaka City Univ., **36**, 243-248 (1988)
- 10) Todor, J., & Lazarus, J., Develop. Med. Child Neurol., **28**, 205-212 (1986)
- 11) Taylor, D., Powell, R., Cherland, E., & Vaughan, C., Develop. Med. Child Neurol., **30**, 759-768 (1988)
- 12) Tanner, J., *Foetus into man. Physical growth from conception to maturity*. Open books, London, (1978) (前川喜平, 熊谷公明訳, 小児発育学: 胎児から成熟まで, 日本小児医事出版社(1983))
- 13) 萱村俊哉, 坂本吉正, 小児保健研究, **48**, 52-58 (1989)
- 14) 萱村俊哉, 中嶋朋子, 坂本吉正, 小児保健研究, **58**, 43-48 (1999)
- 15) Gillberg, C., *A Guide to Asperger syndrome*. Cambridge Univ. Press, London, (2002) (田中康雄監訳, 森田由美訳, アスペルガー症候群がわかる本, 理解と対応のためのガイドブック, 明石書店(2003))
- 16) Touwen, B., *Examination of the child with minor neurological dysfunction (2nd ed.)*. Clin. in Develop. Med.No.71, Heinemann, London, (1979)
- 17) Waber, D., Mann, M., & Merola, J., Develop. Med. Child Neurol., **27**, 491-497 (1985)

受稿日 2015 年 9 月 17 日 受理日 2015 年 11 月 5 日

本学教員の他学術雑誌掲載論文抄録

(人文・社会科学系)

2015 年 1 月～2015 年 12 月

英語文化学科

Influences of Victorian Values on Japanese Versions of Grimm's Fairy Tales

Yoshiko Noguchi (野口芳子)

Fabula, **56** (1/2), 67-78 (2015) [英語論文]

最初に邦訳されたグリム童話は 184「釘」と 83「幸せなハンス」、75「狐と猫」である。3 話を選ばれた理由と改変された理由を明らかにした。翻訳に使われた英訳本に施された変更を、ヴィクトリア朝英国の事情から解説し、その影響を受けた日本のグリム童話受容について考察した。

国際口承文芸学会(ISFNR)第 16 回大会リトアニア(Vilnius, June 25-30, 2013.)で発表した論文。

明治期におけるグリム童話の翻訳と受容 ―初期の英語教科書からの重訳を中心に―

野口芳子

大野寿子編『カラー図説 グリムへの扉』勉誠出版, 211-241 (2015)

グリム童話が日本に導入されたのは、明治の英語教科書によるものである。英語で紹介し、英語から重訳した邦訳本による紹介だ。ドイツ語原典と英語訳との相違がそのまま邦訳に踏襲されている。

その後、ヘルベルト派教育学の普及にともない、ドイツ語原典からの翻訳本が出現する。明治期全体を通して、グリム童話の日本での受容問題を考察した論文。

心理・社会福祉学科

精神保健福祉学の構築 ―ソーシャルワーク実践にみられる演繹的特質―

大西次郎

精神保健福祉学, **3**, 18-34 (2015)

社会から個人への影響を検証する演繹的アプローチに、精神科ソーシャルワーク(PSW)の特質がある。分野横断的な実践知の集積によって、PSW を取り巻く支援理論の構築を図るならば、精神障害者を規定するソーシャルポリシーの側面へ注意を払い続けなくてはならない。

ケアワーク支援を組み込んだ、地域における医療・福祉協働の充実 ―10 年後の精神医療のため、ソーシャルワーカーとともに―

大西次郎

精神科治療学, **30** (10), 1395-1398 (2015)

生活者としての共通感覚で、病者と非病者の枠を超え当事者と向き合う、ケアワークの開かれた価値が目される。ソーシャルワーカー・ケアワーカーと精神科医は相互に固有の援助理論と実践体系を持ち、各専門職と当事者との協働を経て精神障害者の地域生活の充実が図られる。

越境する精神保健福祉学 ―精神科ソーシャルワーク実践における学際性と固有性の両立―

大西次郎

地域ケアリング, **17** (10), 90-92 (2015)

精神科ソーシャルワーク(PSW)と隣接領域間の学際性に、精神保健福祉学の特質を求める“越境する精神保健福祉学”の表現は的確である。

一方で、越境が拡散につながらない、PSW 実践の理論的固有性が問われている。学際性と固有性の双方は、あいまった発展が必要なのである。

葬儀という心理臨床 ―グリーフケアによる連携―

大西次郎

地域ケアリング, **17** (11), 66-69 (2015)

グリーフケアを取り入れた対人援助職としての葬儀従事者の登場により, これから葬儀の領域でも心理職が実践へ携わる機会が現れるだろう.

グリーフケアにおけるカウンセリング機能をどこで主体的に発揮し, どこで他職種に委ねつつ支えていくのが, 心理臨床家に問われている.

現代における死の条理性と, 不条理死への宗教的ケア ―生者と死者をつなぐもの―

大西次郎

地域ケアリング, **17** (13), 72-75 (2015)

近年, 死者は他界へ送り出す存在というより, 生者のそばの見守り人と捉えられている. 死者が現世に共にいることで, 若年/突然の死という不条理に直面した血縁者の記憶は象徴化の機会を失った. 死者を安定した存在に変える, 宗教家の伝統的特質が現代においても希求されている.

多職種間の連携による支援

大西次郎

新版・児童家庭福祉論 ―藝社, 第**14**章, 177-189 (2015)

児童や家庭といった援助される側との連携, 機関・職種間のネットワーク構築は保育ソーシャルワークの基盤である. 地域生活全般に広がる複雑かつ多様な養護問題を扱う現代の保育士は, 子どもへの保育だけにとどまらない, ソーシャルワークに関する知識・技能の修得が求められる.

武庫川女子大学紀要投稿細則

平成 26 年 6 月 5 日 紀要検討委員会決定

I 総 則

1. 投稿資格 本紀要に投稿できるものは、委嘱を含む本学専任の教授、准教授、講師、助教、助手、助手補、および副手とする。上記以外からの寄稿掲載は本委員会の審査の結果による。ただし、本学専任講師以上との共同研究者を含むことはさしつかえない。
2. 原稿内容 学術的研究領域における原著論文とする。ただし、価値ある調査報告および研究資料はこの限りではない。また、抄録(和文)もあわせて巻末に掲載する。
3. 著作権 掲載された論文の著作権は武庫川女子大学に帰属する。
4. 用語 日本語または英語とする。
5. 編集
 - a) 形態 人文・社会科学編および自然科学編として編集する。
 - b) 書式 人文・社会科学編は横書きを原則とし、紀要委員会が必要と認める場合には縦書きも可とする。横書きは横一段として、縦書きは上下二段として組む。また、自然科学編はすべて横書き、横二段として組む。
6. 投稿 原稿はこの細則に従って、作成しなければならない。これに従っていない原稿は作成のし直しを著者に求めることがある。投稿にあたっては、正副原稿(コピーでも可)各一部を提出することとする。なお、写真はコピーとしないこと。原稿は、一編につき、刷り上がり 9 頁以内とする。
7. 審査 紀要委員会は 1 投稿論文につき、原則 2 名の査読者に審査を依頼する。査読者は論文の総合評価について、掲載の可否の判断及び審査意見を付する。論文の採否は査読者の評価を参考に紀要委員会が決定する。
8. その他
 - a) 提出期限を過ぎた原稿は、その理由を問わず、これを受理しない。
 - b) 著者の校正は原則として 2 校までとする。校正に際しては、印刷上の誤り以外の字句の訂正、挿入、および削除は、原則として認めない。
 - c) 別刷りは 50 部とする。これを超過する場合は研究費負担とする。
 - d) その他の必要事項は本委員会が定める。
 - e) この細則の改正は学部長会構成員、図書館長および紀要委員長からなる紀要検討委員会の議を経たうえ、学長がこれを定める。
 - f) 紀要検討委員会の開催は、紀要委員長が発議し、学長がこれを招集する。

II 原 稿

1. 原 稿
 - 1) 原稿は原則として写植方式で作成する。すなわち、原稿の 1 枚がそのまま刷り上がりの 1 頁となるよう、図や表、写真なども、著者自身がアレンジして、原稿の中に組み込みいれておく。
 - 2) 提出原稿は A4 判で作成する。
 - 3) 将来の完全写植式への経過処置として、当面は図や表の入るべき所を白抜きとし、図、表を別に添付して提出することを認める。
 - 4) 原稿の第 1 頁は次の順に従って作成する。
 - i) まず、表題(表題は正確、かつ簡潔に論文内容を表すものであること。また、副題は行を改めて書くこと)、著者名(さらに行を改めて中央に書くこと)、所属(学部、学科を、さらに行を改めて

- 中央に書く)の順に書く。
- ii)和文原稿の場合、原則として、表題、著者名、所属は欧文を添える。
 - iii)次に欧文要旨(200 語前後)を置き、次に、論文の原稿受付日、受理日を欧文で記載し、以下本文を続ける。
 - iv)ただし、人文・社会科学編においては、欧文の表題・著者名・所属および欧文要旨は別紙(A4 判)に作成し、本文の後ろに添える。
- 5)緒言、方法、結果、考察、謝辞及び文献などの大見出しは 2 行取りとする。
- 6)原稿はワープロを用いて以下の要領で打つ。
- i)和文原稿では

人文・社会科学編の場合	1 頁 46 字× 45 行	1 段
ただし、縦書きが認められた場合	1 頁 32 字× 31 行	2 段
自然科学編の場合	1 頁 22 字× 45 行	2 段
 - ii)欧文原稿では

人文・社会科学編の場合	1 頁 96 字前後× 45 行	1 段
自然科学編の場合	1 頁 46 字前後× 45 行	2 段
- 7)和文原稿の場合、文章は原則として簡潔にし、常用漢字、ひらがな、新かなづかいを用いること、外国語音訳、生物の和名等はカタカナを用い、外国人名、生物学名などは原綴りを用いる。
- 8)脚注は、関係する本文中の語の右肩に*、**などをつけ、その頁の下に横線を引き、その下側に挿入すること。行間は 1 スペースとする。
- 9)活字書体の指定は別添資料に従うこと。
- ## 2. 図・表・写真
- 1)同じデータを図と表の両者で示すことは許されない。
 - 2)図、表およびそれらのタイトルならびにその説明文は、和文原稿においても、原則として欧文で書くこと。
 - 3)写真は図として取り扱い、図(写真)、表にはそれぞれ番号(Fig.1, Fig.2, Table 1, Table 2 など)と見出しを記入すること。
 - 4)図の番号(Fig.1, Fig.2 など)および見出しは図の下方に、表の番号および見出しは表の上に記入すること。
 - 5)式は、原則としてワープロを用いて印書すること。
 - 6)図や表、写真など別添原稿にして提出する場合。
 - i)原稿(写真の場合台紙)は本文と同じく A4 に合わせること。
 - ii)図は、印刷に直接使用できるよう、白紙又は青色方眼紙に墨書きとし、文字を活字で入れる場合は、鉛筆書きで記入すること。
 - iii)原図は 1 / 2 に縮尺されることを考慮して作図すること。なお他の縮尺を希望する場合はその仕様を朱書きで明示すること。
 - 7)写真は鮮明なるものとし、必ず台紙(A 4)に貼ること。
 - 8)写真、図等を台紙に貼る時は、製版上必要な場合に簡単に剥がれるよう配慮すること。
 - 9)写真中の文字などは写真の上に薄紙をかけ、指定する位置、文字などを青鉛筆(または青インク)で明示し、委員にその旨伝えること。
- ## 3. 参考文献
- 1)雑誌および単行本の引用の仕方
 - i)本文中の各引用箇所には語句の右肩に 1)、2) …の引用番号を付けること。
 - ii)文献はこの引用番号の順に、論文末尾に一括すること。
 - iii)参考(引用)文献の記入は次の順に従うこと。

(a) 雑誌の場合

1. 著者名, 2. 誌名(欧文誌名はイタリック), 3 巻(和欧ともゴシック) (号), 4. ページ(始め-終わり), 5. 発行年次

なお, 号と発行年次には()をつける.

[例] 3) Mukogawa, H., Nishinomiya, S. and Mukogawa, T., J. Biochem., 57, 456-461 (1994)

8) 武庫川花子, 武庫川太郎, 栄養誌, 40, 1213-1215 (1993)

(b) 単行本の場合

1. 著者名, 2. 書名(欧文書名はイタリック), 3. 発行所と発行場所(初版の場合は, 第版は記さない), 4. ページ(始め-終わり), 5. 発行年次()をつける.

[例] 12) Epstein, E., *Mineral Nutrition of Plant*, John Wiley and Sons. Inc., New York, pp.187-205 (1986)

15) Geddes, R., in *The Polysaccharides*, ed. by Aspinall, G.O., Academic Press, London, vol. 3, pp.283-336 (1985)

17) 小林 悟, 実験医学, 共立出版, 東京, vol. 1, pp.51-63 (1987)

23) 仁田 勇, X線結晶, 仁田 勇ら編, 朝倉書店, 東京, 第2版, pp.937-954 (1980)

2) 文献には原則として, 論文タイトルは付けないが, 必要な場合はこの限りではない.

3) 書物の書名は二重カギカッコを, 論文タイトルは一重カギカッコをつけてもよい.

4) 自然科学編の投稿論文では, 「ibid」や「同上」の省略形は用いず, 所載誌(書)名を繰り返し記載すること. ただし, 人文・社会科学編はこの限りではない.

[例] 1) ヴァルデンフェルス, H., (松山康国・川村永子訳) 『絶対無』, 法蔵館, 京都, pp.85-88 (1986)

2) 同上, p.121 (1986)

3) 高橋 進「老・荘における自然」日本倫理学会・金子武蔵編『自然倫理学的考察』以文社, 東京, pp.104-106 (1979)

4) 中村 元『原始仏教の思想 上』(中村 元選集第13巻), 春秋社, 東京, pp.254-260 (1970)

5) 前掲1), pp.225-241 (1986)

4. その他

1) 本文原稿の各頁の下, 中央部に, 下記の要領で頁数(仮)を書き入れること.

例) 5 / 8 (8頁の原稿の5頁目)

2) 細則によることが著しく困難である場合は, 著者の所属する学会の方式に従っても差し支えない.

3) 原稿は正本一部, 副本二部に USB メモリーまたは CD を添え, 必要事項を記入した投稿申込書とともに提出する.

活字指定一覧表

	和 文 論 文	欧 文 論 文
主 題	16 P 並体(明朝)	16 P Cent. (頭のみ Cap.)
副 題	14 P 並体	14 P Cent. (頭のみ Cap.)
著 者 名	12 P 並体	12 P Cent. (頭のみ Cap.)
大 見 出(緒言など)	12 P 太字体(ゴシック)	12 P Gothic
小 見 出	10.5 P 太字体	
本文	10 P 並体	10 P Cent.
本文中の欧語, 数字	10 P Century	---
本文右肩へ添付の引用番号 本文 ^{1, 3-5)}	06 P 並体	06 P Cent.
受理年月日脚注題見出	08 P 並体	08 P Cent.
文 献 欄	09 P 並体	09 P Cent.
欧 文 項	(欧文)	(和文)
主 題	16 P Cent. 頭のみ Cap.	16 P 並体(明朝)
副 題	14 P Cent. 頭のみ Cap.	14 P 並体
著者名	12 P Cent. 頭のみ Cap.	12 P 並体
本文(要約文)	10.5 P Cent. Boldface	10.5 P 並体
図表の表題	09 P 並体	09 P Cent. Boldface

欧文人名	頭のみ Cap. 後は小文字 Cent. (Rayan.R=Cap.)
学名その他ラテン語	Italic
文献欄	
欧文雑誌及び書名	Italic
雑誌の巻数(和欧とも)	Gothic

活字書体の指定(原稿に朱書きでアンダーライン)

Capital	=====	Italic Capital	=====
Small Capital	=====	Gothic Italic	=====
Italic	=====	Githic Capital	=====
Gothic	=====		

本文は句読点にする.

武庫川女子大学紀要第 卷投稿申込書

紀要編集委員会殿

下記のとおり、紀要 $\left\{ \begin{array}{l} \text{人文・社会科学} \\ \text{自然科学} \end{array} \right\}$ 編に投稿したいので申し込みます。(投稿する方に○印)

投稿者氏名

所属(学科・研究室)

内線

メールアドレス

1 表題

和文：

欧文：

2 著者名(共同執筆の場合のみ。次頁に投稿者を含め全員記入)

3 用語(該当語に○印)

和文

欧文

4 原稿枚数

合計 枚

内訳 1) 本文 枚

2) 図 枚

3) 写真 枚(台紙の枚数)

4) 表 枚

5 提出メディア

FD, CD

USB, その他

6 別刷り希望部数

公費負担分 50 部 + 研究費負担分()部

計 部

審査員承認

1) 氏名 印

2) 氏名 印

切り取り線

割印

投稿論文受付票

殿

受付日 年 月 日

紀要編集委員会

武庫川女子大学紀要(人文・社会科学編, 自然科学編)第 62 ～ 63 巻
査読者一覧(敬称略・五十音順)

氏 名	所 属
安東 由則	(武庫川女子大学)
池田 克巳	(武庫川女子大学)
石川 道子	(武庫川女子大学)
岩田 章吾	(武庫川女子大学)
遠藤 晶	(武庫川女子大学)
大岡 由佳	(武庫川女子大学)
河合 優年	(武庫川女子大学)
北島 見江	(武庫川女子大学)
鞍田 三貴	(武庫川女子大学)
高 明	(武庫川女子大学)
寒川 恒夫	(早稲田大学スポーツ科学学術院教授)
竹原 威滋	(梅花女子大学客員教授)
田中 每実	(武庫川女子大学)
玉井 暲	(武庫川女子大学)
玉木 健弘	(武庫川女子大学)
奈良 安雄	(兵庫県立大学工学部教授)
西井 克泰	(武庫川女子大学)
根岸 裕子	(武庫川女子大学)
野口 芳子	(武庫川女子大学)
濱谷 英次	(武庫川女子大学)
平田 聡	(京都大学野生動物研究センター教授)
藤田 眞一	(武庫川女子大学名誉教授)
藤谷 智子	(武庫川女子大学)
本多 修	(武庫川女子大学)
前田佳予子	(武庫川女子大学)
松下 良平	(武庫川女子大学)
三好 庸隆	(武庫川女子大学)
安井菜穂美	(武庫川女子大学)
矢野 裕俊	(武庫川女子大学)
倭 英司	(武庫川女子大学)
横川 公子	(武庫川女子大学)
渡邊 完児	(武庫川女子大学)

ネイティブ・チェック担当者 クリストファー P. ミチェック(武庫川女子大学)

平成 28 年 3 月 10 日 印刷

平成 28 年 3 月 31 日 発行

編 集 者 武 庫 川 女 子 大 学
紀 要 委 員 会

委 員 長 瀬 口 和 義

副 委 員 長 野 口 芳 子

委 員 松 下 良 平 澤 田 小 百 合

池 田 克 巳

発 行 者 武 庫 川 女 子 大 学
西 宮 市 池 開 町 6 番 46 号

印 刷 所 大 和 出 版 印 刷 株 式 会 社
神 戸 市 東 灘 区 向 洋 町 東 2 - 7 - 2